

傾城阿波乃鳴門

近松平半二
寺田文吉
竹本三郎兵衛

第一

唐の七賢、秋山廣既籍元威、尙秀、王戎、山濤、列伶思ひくに出立て離山の麗、長林竹に會合あり種々の遊宴たのしけれ、秋山廣各に打むかひ、誠や琴詩酒の三ツの友、あら面白の氣色やあ、竹の林に猛虎住池中へ、龍の住家といへ共此七賢へ異かへり、竹中に酒を愛して蛇呑といふ異名も殊にこつぶの盃酌かへしたる不老不死、さいつ押へつ盃の間の手元を見ての間廻る酒宴に、唐歌のちやんほんりんとんすべろんちやぶくすい、

べいく、びんくろじつく、ぱいくすべいらんびんく、ゑいく
さ、諷ふしやうがのあやもあき是からハ拳酒と又つきかけて、呑や諷へ
や糸竹の縁に雀の一踊拳を拍子の踊ぶり、ムテ、チエイロマヤツトセイ
ヨイヨイ、ウキウムテ、ヤツトセイヨイヨイゴウ、チエイ、ハマヤツトセイ
ヨイヨイ、こんぶ踊が日本にあらか有ハ既籍が懷中と、一巻を取出せば、
六人立寄さらくさつと押抜き、立別れ讀有様ハ屏風襖の繪そら言虛
八百の文言と笑ふに、太夫引舟禿ばらくと走寄、秋山廣す、憎と、
措擲れあいたしこ是ハ七賢けんによもあい赦せくと逡廻れば、亭主
九八押へだて、ア高雄様、お恨ハ涉尤、是ハ一番我等が貰ひといへ共太
夫ハイク、此間から心のたけを書たみ、一つに艦で虚八百のと今の方だ
ら、わたしや腹ひ立わいあ、太夫すのが皆道理、私連もア三彌、ア私も俱
に立かれバ、待く、わしハ眞實に思へ共此末社の賢人共が、まだ

てかけての口拍子、祭の俄下稽古もふ七賢人取置て、中直しに奥座敷て
酒にせう、かんにん仕やといふに太夫ハ嬉しさの笑顔に取付奉頭持サ
機嫌が直つたぞ九八様、いかにもく東助、西助、佐渡七辨助大助合點
か、合點亥やく、且那太夫すお先へく、手を引合て先に立跡に皆よ聲
猪へ七賢人亥や、西樂人亥や、俄亥やく、と騒ぎ立てぞ、奥ざしき廓
賑ハふ大絞日機嫌も吉原巴屋に居續遊びの大名客、玉木衛門之助アシタ大
騒美麗輝く燭臺の火影カクまばゆき有様ハ暉見城共いひつべし、大名風も
打碎、姿衛門も亥ぞけあく、太夫末社を引連て、皆よ座敷に入來り、サアく是
から酒にせう、シレか跳子か盃カク中居の政が會釋カクこぼしてつゞかくれバアシタ
こりや強い酌カクにくさも惜し助てくれシヤ大將の御無理が出た、亥たが惜
けれど、助て上いと、無息にすつと呑自慢カクモケあやつと引受て、サア太夫、中
直りの盃とさらりと呑で指盃、高雄取上下戸の氣さんじちよつと受カク中

直りの盃へ済だれど堅けれ共お慮外あがらと指かゝれば次の間を玄
ぱらくく其間を仕らふと襖押明いか物作り一腰ばつ込胸に一物邪
面のつさくと入來ればたいこ持もじ氣味悪く座敷の興も覺にけり、
衛門之助身縒ひ四ついに見馴ぬ男太夫が間を好い様子あらん。其方
へ何者成ぞ。此やらうめへ蛇河だらがの團八といふ者で忍んす。此座敷へ
へ何用有て踏込ふみだざく子細を語れと氣色するぞく見へければ團八へ
猶強付ヨレこへい顔さんすあいの阿州の大名玉木衛門之助殿でも此廓
へ入込ばわしらと同じ客揚屋のざしき酒間をする事ハ成ぬ法でござ
すかあと物工成詞の端衛門之助推量し亥つとおさへる胸の中これらへ
ず中居が引取てヨレゆか近付でもあいお方頼もせぬに問せふといはずか
ん。お前へほんに梶原平次間をせふといひそりやむりじや横間から指出
すとだまつて去で下さんせ四あたやかましうさづるまいそもそもじにや構

れぬ、今跡をいふて聞そふ。高がかうじや、此高雄を見初てから我等首
尺はせへ愚おほが四五尺をまだ其上登詰た梯子の曲が、鞠くまて居るじやげれ共こあ
んが晝夜の揚詰あげづめ。おれが手に廻らぬ故ゆゑに此座敷へしかけたへ太夫を
貰もらひに來たのじやこふ團八が云出いだすからへ金輪際こりんざい貰もらひく、衛門殿えもんどの下あれ
く貰もらひたと腕うでまくりする堅横島かたよこじま並なま、ゐる者ものもあぶくと手に汗握あせこする斗
あり、衛門之助詞を和らげ、（詞）思ひ寄よぬ事を聞、成程太夫に夫程執心しつしんあら
べ、其方に遣おとへそふといひたいが、アあらぬ、身が寵愛てらあいの、此女殊に身受うけも
今日相濟さうき、今晚身が屋敷へ連歸る、夫に何ぞや下郎の分際ぶんざいで、身が座敷へ
踏込みどり慮外者りよわいしゃ、生置なまきぬ奴やつあれ共遊くわう興ききの妨さへにもあれバ今いれ赦ゆるす叶はぬ願ねがひ
早歸はやまつれと、さつと答こたへる鶲鵠返あづねかみかみかみかみかみかみし、歸かへるまい、是非太夫おほゆうを貰もらひにやいあぬと、
聞きる中居なかゐへむ志しやく志しや腹はら、夫おとこへ餘り長ちがうであらふ、ああたのか慈悲じみ有難うなはいと思ふて、早はやいあんせ、あたいやらういあの顔ほほわいと、恥はずめられて

も蛙の面かえるそふいへぱもふ腕うでづく、サ衛門えもんくれる氣が今一言いへ聞ふと、
場所のあしきを付込で喧嘩けんか玄げんかけの面おもて魂たまたいこの佐渡七押隔はなごしヤく
團八様だんぱちやう最前から旦那おとこのふつ玄げんやる事を打消ほせしておつ玄げんやるへ、きついほ
無理むりかふ座敷ざしきが玄げんらけて、私が商賣しょうびたいと持もつも上あつたり、浮機うき嫌直けんじきし
て一いつ上あつて、お歸かへりあされて下ささりませと詫わる程猶付ゆふ上あり、そりや何
ほざく、うぬらうぬらが知した事ことで、似合あつあつた様ようにすつ込こでけつかれと立た蹴けに
かゝる足首捕あし聞分きみのあいお方ほう、何なんばたいと持もつ玄げんや連同れんとうし人間ひと、お前の
お脚すねでけらふと、そりや餘あまりお胴欲どうよく足元あしのあかい内うち、此こお脚すねの満足まんぞくあ
中に、早はやふお歸かへりあされませと、足首あし玄げんつかと痛いたむれり、顔おもてを玄げんかめてくわい
こりや痛いたいがあく、己のりや手向てむかひをひろぐあ、手向てむかひ玄げんやあい足
向むかひ玄げんや、タ、こたいと持もつに似合あつあつぬ、こりや手ひきいめに合あつしむつた、よ堪かん
忍しのがあらぬぬと、ずれと抜ぬきて切きかける、腕首うで摑つかんでねぢ上ある、最前から詞こと甘あま

い中に歸れば、こんあ痛いめに合さぬ、渋名を出されぬ遊里のふ慈悲、腰骨に覺へたかと、蹴飛す早業向ふへ輕わざ間拍子もよいたいこ持、頓作もよき男の團八漸起上り、腰をかゝへて、こりや又ふくりんかけたあ、云分の有やつあれど了管玄ていんでこますひ、已腰骨によふ覺へたぞ、必覺へてけつかれど、ちんがく、達者あ物へ口目玉、痛くもにらみ付足を引すり歸ける、佐渡七出かしたく、たいこ持に似合ぬ、動、そち見上た者玄やあ、いやもふ二才の時からほで轉業が過ての此身分今のお役に立と申も、藝の身を助る程あ不仕合と申様あ物でござりまする、いかにもく、當座の褒美と山吹色を投出す、有難しど戴けば、母あるいは奴がうせおつて、興がさめた氣をかへて、離座敷で呑直そふ、そりやこそ旦那の御出じや、中居衆頼ぞ、ヒンヨイ亭主が玄やべる、ヒンヨイ打連てこそ入にけり、既に其日も黄昏に、人顔闇樹木のかげ、切戸をそつと

押明て忍び来る以前の團八跡に續て定九郎、内の様子を見廻す所に時分を窺ひ奥々そつと佐渡七が傍に氣配立出て三人見合黙々指足庭の邊に立留り定九郎小聲に成^{ヨリヤ}佐渡七、そちも知通り小野田郡兵衛殿に頼まれて衛門之助殿を殺す契約然る所此間より此廓に居續の大騒と聞を幸其方を頼置られ共吉左右心元あく此團八を最前入込したが何として殺して仕廻いぬ様子いかゞと尋れば佐渡七も摺寄て成程御願故昨日より座敷を勤仕課られば大金殺すに油斷へ致さね共晝夜共に末社を集めて大騒附^ヨが多ければ只今迄の延引玄たが又ぞふして衛門之助殿を殺してか仕廻あざるゝ様子が得と承へりたう存じます、成程不審尤殿衛門之助一國の主と見て酒宴遊興に長し身持放埒妾^{ハラシ}其數知らず夫のみあらず國中の嫁娘をかり集或は後家がりあんぞ金銀を費し様まと奢を極所詮生置て我^ムが望も叶はず鄧兵衛殿とや合密に殺

す思案子細といふへ此通と我身の欲を尤に云あらべてぞ物がたる。佐渡七ナナ打黙タマシキ^同夫で様子が知ました、志たが最前園八様見へたれ共、あの手ぢやいかぬと思ふた故實事仕を見志らかしたりや呑込で、投られさんした其ぎばの甘さミツバチ芝居の敵役にしても金じやくと譽ハサウエれバ圖に乘マサニ下地が有宮島の芝居も一年働ハララクたて、拵て衛門之助も今夜中にいぬる様子殺して仕廻ふ思案ハシマツあいかずアいつその事呼出して、シ此相口でぐつさりいへして、シ聲が高い、此定九郎が極上カタマリの思案有て忍び入た、其湯思案ハシマツ、其思案ハシマツと夕月夜泉水の金魚をすくひ手水鉢に寫し入コリヤ此様に勢能金魚あれ共、殺す思案ハシマツかふと、懷中ハラマチお藥取出し水にそゝげばこへいかに、動く魚も忽に色を變して死てけり、二人の者ハ鞠顔ハナヅチ奇妙シラフ此藥ハシマツ是こそ唐の著玉カタマリが傳ふる毒藥、此藥を酒に入衛門之助に呑せ、殺して仕廻へバ手間障入ハララクず、併仕損ハラダルしまい物でもある。

じ團八へ大門口に待伏して、衛門之助が歸るを待て只一打、爰で逃さば
出口で討取、兩方遁さぬ鎌思案と聞ふ團八できたく、然らば佐渡七能
吉左右を待て居る、ハット斗に團八へ大門口へと出て行、ヨリヤ佐渡七、此妙藥へ
そちが氣轉キテルで、合點かと、渡せば受取か氣遣あされます、今宵の中に、チ、
でかした、身共が顔を合して、後日の邪摩、身へ屋敷へ罷歸る、隨分ぬか
るあ、かさらばさらばと、手筈ハズを極め定九郎切戸口カギ立歸る跡に佐渡七
一工夫、奥を窺ふ其折柄、爰へ來るへ衛門之助是幸と佐渡七へ勝手へ急
行跡へ、奥に末社エツジヤを留置て、高雄伴ひ、衛門之助へ立出て、ヨレ太夫、今奥でと
つくりと咄した通スム、そあたと肌ヒダふれられぬといふ譯カタへ、肌身スキンを放さず
所持してゐやる太切る一品、其譯カタさへ納カツらば、其時へどう成共、合點が
いたか、ア、とつくりと合點が參りました、添ふござんすと、何か二人が玄
めやかに、咄す間に佐渡七が跳子盃持て出、ヨリヤ一旦那手が悪い、私等をおま

きのかばやき、太夫すとお二人甘いあく、甘い次手に何と爰で一ツ上
りませぬかと、口の諸白心の悪酒、酔しかけてぞ進むれば、是へよふを
氣が付た、サアそんあら一つ呑ふない、サン一ヶつけ、さらばか酌とつきかく
れバ一つ受、何か思案し、イヤく直に呑でハ面白あい、サア一拳せふ、ハサマア一
つ上つてから跡で一拳致しませふ、イヤくとふやら呑に拍子があり、サア
是非に一拳と、いふに違背も何の其込付て呑さんと、サア參りませふ、ロモ
ヂエイ、ハマふつと三拳サア勝玄や、佐渡七呑といひれて恂り、此酒を私
に、サ拳に負たまや知た事、バくめつそふあ是を呑でたまる物でござりま
すか、よしすりやよふ呑ぬじや迄其筈、ソリヤ佐渡七、此酒にハ毒薬が入て
有ふがあと、星をさられて何と、忘るまいと思ふか、最前の物語皆聞た、
道ぬ所覺悟せい、仕廻ふた、見顯へしたれば百年め、モウ是非に及へぬ、と
相口引抜突かくれバ、衛門之助身をかへし、刀物もき取り様、下へ蹴落

せひ、叶へぬと佐渡七ハ息も切戸にかけ出て、遙散にこそ逃て行、此物
音に亭主末社ばらくと走出、様子を聞る廓の見せしめと、追かけ行を
待々詮義の有奴あれ共身が存る旨有バ逃バ逃セ、何もかもかれが心
に取てゐるく、併太夫が身受ハ日中に相濟、此所に長居ハ無用、^ト亭主
太夫を連て、歸らふといふに九八罷出、夫ハふ名殘惜う存まする去る
がら此間からの大騒世^{さわぎ}上での取ざた、や管領の傍耳^{そじ}へも入た様あ噂い
か様もふお歸りあされたもよふござりまする、そふあうてもいぬる
心^{サア}太夫おじやと立上れべ、そんあら旦那、又近^{アラシ}に由來臨^リを松の位太
夫様、隨分おまめてくと、たいこ中居も口^{アシ}に、名残を惜む暇乞、高雄も
俱に盡^{ハシマ}せぬ思ひ、お前方もは無事で、^ト馴染^{ハシマ}涙の袖の露、衛門之助氣をか
へて、皆も隨分ままで居い、又月見に、太夫を連て大騒^{ハシマ}と、大風にばいく
はいと亭主がそより、^テレ^トいたいこ衆、大門口迄七^{ハシマ}賢人のはやしでお供ひ

よからふサくお立と浮れ立皆々 打連騒行所（あいせうぎょうしょ）ハ名にふ大門口出
口の柳夜の風亂騒し折からに、團八（だんぱち）ハ宵（よ）も、佐渡七（さわがた）が志らせをば、今や
今やと待所に、息を切て佐渡七（さわがた）、命からべ、逃來れ（にげき）佐渡七（さわがた）か、宵か
らほつと待退屈首尾（たまづくじゅひ）ひどふじや、首尾さん（くわいさん）、思ひの外手強いや
つ、まだ其上に客に及向ふ大それた狼籍者（ろうせきしゃ）廊中（ろうちゆう）への見せしめと、私が宿
を叩上方（たたきあがみ）と詮義する、モッ爰に（もいに）居られぬ、とあんの宿に隠れて居る跡
へ貴様のお衝賴（はむらい）と云捨て、足早にこそ走行（しゆこう）、埒（らち）もあいよい々 何
でもおれが一手柄（てがら）と堅睡（かたづ）を呑（の）で、大門の傍（かた）に忍び待居たり、斯共志らず
うてんつてん、唐樂の音のはやし物、先に志づ（しづ）昇出（あがき）す、俄ねり物七暨
人（ひと）待設（まちあつ）たる團八が駕（か）を目充（めそ）の手練（てねり）の手裏（てうり）劍（けん）目充達（めそたつ）へず打込（うちこ）ば、狼籍（ろうせき）
者通すあ、と呼へる聲に團八（だんぱち）ハ、玄すましたりと逸參（いつさん）に、跡をも見ずして
逃失（とうしつ）たり、斯と聞く高雄（たかごう）ハあひて走寄（そうぎ）かあじやあ衛門様（えもんさま）お心いいか

かぞと駕の左右を引上で見れば内より着替の風呂敷是へと驚後を衛門之助へ爰に居ると七賢人の出立にてぬつと出れば又悔りヤアお前へそこにござつたかと悦ぶ中にも不審顔合點の行ぬへ尤も宵に來りし團八と佐渡七兩人云合せ我を討ん面魂我歸るを待伏しかゝる狼藉あらんと思ひそあたを跡から駕の中より我等が身かへり漢の紀信がはかりと今へはかかる人もあり我身へ駕に打乗て太夫を先に道中や廓をぬけしかでの鳥跡に残りし友千鳥大鳥大名大門口別れてこそハ「歸りけれ」

第二

櫻井主膳と表札を打ねど其名隠れあき阿波の一城主玉木衛門之助殿譜代の侍主従俱に武藏野の月も忠義に目もふれぬ堅い屋敷の内庭に掃除へ得手のやつこれら打水玉の露程もかげひあたあく見へにける

立切一間、音あいて立出る女房闌の戸はでを好み福の姿、心も志とやかに
チ、庭の掃除ハ又平鐵内日番の勤怠りあく二人共太義く、殊に夫ハき
のふゞ管領職の傍召にて今にふいて歸りもある、傍用の筋ハ志らね共
さのみ氣づかふ事も有まい、歸られ次第用事もあらんせめて玄べしの
内成共、部屋へいて休息しや、早ふくといたへる下部、然らば傍免と兩
人ハ勝手へこそ立て行取次役の婢共ばらくと走出ゆく奥様前方
お館に勤られし中間の十郎兵衛殿何やらお願の筋有連、お次にひか
へて居られます、何十郎兵衛がわしに逢たいとあ、何とも有愛へ呼
ひや、早ふくに婢共其儘立て入来る、館の住居かれらねどかへる姿の
十郎兵衛勘當の身のはゝもあき身すばらしげに踞る、珍らしや十郎
兵衛歩中間とへ云あがら主膳殿の心に叶ひ、立にも居るにも十郎兵衛
と情が怨と成世の中、連合の氣に背き國を出やつてもふ六年、顔ハ見す

共便でも聞たいといひ思へ共夫の氣質ちを計兼案じくらせしそあたの身
の上うへお弓ゆみも無事で出來た子も、息災そきまでゐるかいのと殘る方あき關の戸
が尋ねも深ふかき三世の縁、身に玄くろみ渡る十郎兵衛、涙と俱に兩手をつき奥様
の仰あおのごとく見るかけもあき私を人らしく思召おもなわし重々厚あつき旦那の渉恩
報ほうせん事こともあさよしや、酒に犯おがされ郡兵衛殿の家來と口論の上手疵負
し拙者あやまちが誤り、縛首しはにもあふべき所喧嘩けんか兩成敗ぜいばいと有て兩人共に渉退放しつひは
已れ今一度、何卒ごそ旦那のお爲に成御勘當かんとうの侘せんと思へと叶かなぬ足手
まどひ、三ツに成娘むすめをハ國元の母に預、女房連て大坂の、玄くろるべを求め五
年、うき世渡りよ致せ共渉主人のお身の上拜おがいまぬ日迎むかひざりませぬ、
女房めいめが下しにい、お敵おのしの出る迄のお國へ入事叶かなず承うけられば今年い
此地にお渡り遊まわるゝ折ときを見合勘氣の願ひ、ひらにせひにといさめ
られ、心こころの先へ飛立とはいり兼またるおやしきの渉門前に一時余まり行ゆむ

中に門番衆が咎を擅に嘲と昔の誤り今身に思ひ當りし此身の上叶
ぬ迄も御赦免の詫の綱手の奥様の慘情お慈悲と斗にて先非を悔し
男泣心を不便と思ひやり、其悔の道理く、けふそあたが來たこそ幸
よい時分に呼出そふ最早歸りに間も有まい次でまちややといふ間あ
き、且那の歸りと下部が聲、乞らせまばゆき奥庭へいそく立て入江ける、早
立歸る櫻井主膳常よへ酌ぬ盃の廻り過たるむいき酒羽織の肩のずれ
るもしらず、ひよろ付足元、ああぶあやと闕の戸が取手を乞つと引寄て、
びからせ給ふあ北の方手前か上り歸りがけ、忍ひ付たる鼓原の揚屋
で歎献下され、其上有がたい浮意の趣嘲して聞そか。よしに致そふ
て面白い手管の諸譯聞たからふが子あらぬ、何と憎いかく、是へ
又ついに覺ぬ醉姿、ケ様あ事と乞つたらばお乗物でも上ふ物、何との
給ふ我等醉ハ仕らぬ堅いそもじのお迎えたいと中居に送られて漸只

今古きを去て新しう外へとめ木の香箱に、かげとひあたの二つ紋付ね
ばあらぬ我等が心、お氣に入らず、勝手次第、いべくいの暇の状書て進
上やそふかと酒がいゝするざれ言に、惜氣の口を開られて何と云寄片
男浪さへぐ胸をば押ゑづめ、あのうつゑやる事わいの折、左様の浮
樂しみも且へ身の浮養生、私が何とすまえよ、夫でこそ主膳が女房
粹めくと背たゝきいやといへさぬ釣鎌打ば響す表の方、小野田郡兵
衛様浮入ありと取次聲に驚女房、や今のを聞あされたか、成程お
國の浮家老郡兵衛殿のお入あれど、此肺でへ連れぬく、我等暫く睡眠
致さん宜しく斗ひ給へれと廻らぬ舌を巻かける管ももつる、どうく
自奥へ行さへちぞり足、衣紋縫ひ闕の戸か出向ふ間もあく小野田郡兵
衛兼て心れ隔の襖、さもあらけあく入來る顔も詞もよがく、敷レサ闕の
戸戸、只今勝手て主膳殿へと尋れば、館にござると承へつたが、手前が參

つたと聞いて、最早かはづしめされたかあ、是ひ又あられもるい、か珍らし
いお前の下り、悦びこそすれ何のあるに隠れま志よ、去あがら明る
に問をき夏の夜の勞を暫し奥の間に、^シ女子共、郡兵衛様の侍出と、主膳
殿へかえらせナ玄や、早ふくの内とも、櫻井主膳、夫へ參つて侍對面す
さんと、よからぬ中も面に出さず、上下改め一間を出、是ひく、お下りの
噂もあけれど、思ひよらざる今、對面、いつ見ても、無事、そふで先へ重
疊、^{イヤ}主膳殿にも堅固の躰、我迎も衛門之助殿の家老といへど、殿様あ
しの田舎住居貴殿の夫に引かへて、花のか江戸の家老職、^シ主人のお膝
元と云、跡腹痛ぬふ樂しみで、^シ夫婦共にきつい若やき。イヤお羨しう存る、
是ひ又郡兵衛殿の、女夫の者を玄よげとそふでか、^{サク}是へ、先是へと、合
ぬ工合を間に合て、持長ずれば、圓に乗て、遠慮、志玄やくも高上り櫻井主
膳異義繕ひ、最前主人に浮意得たれど、其元のか噂もあかりしが、當着召

れたひいつ何時、シテ殿にハ涉對面済ましたか、いやく、國元を出まし
てより昨日迄十日の道中、思ひがけふ參つたいたと折入て其元へ相談
致さねば叶へぬ故、未主人にも對面させず、參りがけに山口定九郎殿へ
立寄、直様是へ參し所貴殿のお顔を見受取から無禮の眞平、是へ又痛入
用事と有へゆる事と打くつろいでお物語、戻の戸、早いが賞讃ついち
よつと一種一瓶少付されやれ、ほんに私ども事が、最前々取紛れ、お茶さ
へも上ませずお報しもされと立上る、いや奥方お心遣無用、茶も
酒も所望にあし、併主膳殿の志無下よ致すも本意あらず、逆も御雜作
に預り次手、只一色の肴に、主膳殿のお手際、すつぱりと切腹めされ、夫
を肴に一献酌ふ、奥方早く御用意と聞もあへず膝立直し、申夫主膳にハ
何誤り、何科有て腹切の玄や、疎忽ある事おつ玄やつたら、お國の家老とハ
いひしませぬぞ女房だまれ、譬いか様の事有共、郡兵衛殿の差圖を受腹

を切る某あらず殊に又切腹と有ば家の大事左様の大事を舌三寸申出
した其子細へ、間に及ばぬこあたの胸に覺有る今度の誤り、御先祖古
代々續、浪風立ざる家筋あれ共主膳といふ馬鹿侍にたらされ毎日毎夜
の廓通ひ、管領家の沙汰大方あらず、御主人閉門との噂聞と其儘此家へ
來たれ、貴殿の口からいはさん爲有やうに白狀、何事かと存
じたれば、其義あればか心遣ひ無用にめされ、微塵いさゝか覺あき廓
通の御取ざた、手前の殿の名をかつて奢を極し紛れ者尋ね出す其間五
十日の中延を乞請やすらかに事を納め、主人を供せし某に切腹せよと
ハ何のたれ言、夫程の義へ知行米を戴くかれり、生れ子でも申上ふが、
若又其尋るやつが其元の手に入ぬ時、念に及ぬ切腹致す、貴殿が腹
をめざるれば、衛門之助様の御身も晴ますかあ、イニシ濟と思さば今爰で切
腹を見届ませふ。郡兵衛様おひかへあされ、申主膳様、お二人の争ひ

を、聞へ聞程只あらぬ、主人の御事お前の身の上まへ様子あらねば道理くり。
差さやる通某を急きのふ召めしと聞やいあ、取物も取あへず、屋敷やしきを出る其折
から、主人も俱に御前へ参まいるべしと重かさねて向むかふ使者の口くち上あ途た中にて出合
頭がしら直様主君の傍供わきそや承うけりし其趣衛門之助其身の徳たらこを甲こうに着きて、日々の
奢うぶいふに及およばず、剥吉原の廓はなわへ入込、毎日毎夜の藝げい藝げい又有る時ときあ
らぬ月雪花の催よみがえにて、名有太夫も我一とあじみ重かさねて手てに手てを取屋敷の
内うちも廓同前、武士に似合みあひぬ三弦さんげん太鼓たいこ現あらわぬかして大名の家名かめいを下おろすハ何
故ゆゑぞ早く言譯ごんが致されよと尋たずの内うちも立板たていたに水みずを流ながせる主人の返答へんとう十が
九十九其座そのざにて、ナ譯な立たれ共衛門之助と云いふらし訴うた出だたる上うへあれば
其名なまを付つたる紛まぎれ者五十日の日延ひのびの内うち某急度きつど吟咏ぎんぎやくをとげ、主君の言譯
致さんと遮さへて願ねひしかば早速さうそくに相叶あわせひ我わの夫おも菱原よしはらへ馬鹿ばかに成なて窺うかがふ
所ところ、衛門之助といひふらし、上うへも亦また大騒おほなぎにて立た歸かつたる殘念ざんねん至極しじき追お

かけんと思ひしがやく 一旦此場の陣を引ゆるかせに詮義せずば、捕がた
しと思ふから、我も是身持放^{はなぶら}、主人の爲の遊興^{ゆうけい}、毒を以て毒を消、主
膳が極めし胸の内、連添者にも深く包^{つか}情弱^{じやく}に見せし詮義の第一^一、主膳
殿がかれいく、潔白^{きわく}らし、う聞ゆれど、管領^{くわんりゆう}の仰の通衛門之助殿をそ
そあかし、高雄^{たかお}といへる太夫を身受さしたもこあたの斗^{ぼう}ひとつく存し
てかる某にうへぬんめりの突付賣其手で^ハ行ぬ、もふよいかけんにい
ふて仕廻^{しわき}やれ、左程實正^{じょうしやう}は主人を^ハ渉供^{せし}といふ、慥^{なまか}あ證據^{しよご}見せま
せう、山口定九郎殿最前の女是へ同道めされ、早ふく、畏つたと定九郎
連立姿振袖^{たんたいすいしゆう}の打かけ摸^{なぐ}様外^{ほか}あらぬ實^{じつ}も廓^{こう}の風俗^{ふうぞく}と、紛^{まが}ふ方^{かた}あき^{あき}其粧^{よそ}ひ
主膳殿見られたか、今日是へくる道すがら、此者に^ハ出合し所^ハ主膳様のあ
屋敷^{やしき}へと尋る餘り、様子を聞^ハ右の段々山口殿諸共に同道したる此女
何と覺がござらふが存ませぬ、拙者此江戸表^{おもて}に罷^{よしま}れど、渡原へ參つた

ハ夜前が初め、けいせいにもせよ何にもせよ手前毛頭近付てハござらぬ、そふでござんす。イヤ女中様是に居らるゝへ私が夫櫻井主膳とやますがお前の尋心宛ハ、どこへお出】あさるゝへと問れて高雄も打につこり、ついにおめもじいたさねべお顔見えらふ様もあし、お名ハ違ハぬ主膳様、私ハお前の主人衛門様に受出されし、高雄をゆ者でござんすが、衛門様のふつゑやるにハ、屋敷の内ハ人目有櫻井主膳と名をいふて、何じや有ふとそこへ行委細ハ文で跡からと教の道も跡や先尋迷ひし折からに、ああた方りむ目にかゝり尋やいあ、無駄に私を駕にのせ、連て見へた此ふ屋敷、わたゑや何ともえらぬ事、悪い所へよい様に取あし頼上ます、と聲さへ志せげを止めけり櫻井ふしきの顔色にて、心得ぬ高雄の詞、我家を充に入込せしハ某に越度を付切腹させんず工事、ヨリヤ女房詮義有高雄太夫奥へ伴ひいたはり置給ハる日延の今日より、其曲者を

尋出し主人の勿論此身の云譯さつぱり仕上でお目にかけふ山口わせ
いと立上る。そふへ得致さぬ拙者貴殿の組下といへど、疑ひかゝり
し其元されば屋敷の内々外へ迎へ、一寸も動さひ、夫が互に身の潔白、何
と郡兵衛殿左様でござらぬか、中々左様警貴殿がいか様に尋られて
も、左程の大事を仕出すやつめつたにか手には入まずまい、入ぬ事に骨
折て、跡で後悔あざれうより、身が前で切腹く、彌主人に科あくんば誤まち
あい義を申上家を立つるハ拙者が役目、やり夫が證義致さふと承つて
立歸つた御所の指圖に違變へ有まい、されば吟味も此方から尋出す。
此役目十郎兵衛おじやと闘の戸が差圖にはつと立てる必いさみのひ
らく眉まゆ巴ば十郎兵衛聞きやる通りの品されば、主膳殿に成かへり、殿の名
を銜し曲者、一時も早く詮義仕出し、夫に手渡しする氣へあいか、何が扱
最前より始終の様子承へり、出るにも主人の傍そばお前様のお情で結構あ役

目を紛へる、此勢に一詮義拙者に任せ下されと聞もあらせずだより
上らふ郡兵衛が前共憚ず誰が赦して此家へうせた、うぬの元國元で身が
家來に手疵ハナを負せ首ぶち放す所を是成主膳がぬつペコつペリ命助る
其がわり一生脚サルへ切込さぬと潔白らしふいふて置て内證ナシヨウで呼にやり
此詮義さそふ抔ハラといふといせんさく侍の禮義も志らぬ大同前の己
等れ庭の小隅サカナで尾をふり廻し捨ぶちらふがよい役とあく迄悪口こ
らへ兼短氣たんきの十郎兵衛立かゝるを押ゆる目遣ひ、さはつと志づまる弱よほ
身へ付込志ね悪吃相かへて立かゝるゝ此郡兵衛又足向ふのか慮外おもかげある
やつと傍わざある茶碗わん真額まかほくだけと打付けば、眉間に當つて流るゝ血汐ちよぢ猶
もこちらの無念の顔色がんしょく云分あらべぬかして見よ刀脇差わきさしさすやつあ
らばよもや云分有まいといへど主膳も理の當然どうぜんはたとふさがる、關の
戸も何と開かんやうもあし折から下部があいたゞしく京都の町人藤

屋伊左衛門とナ者、涉詮義の手がより有て、お旦那へ直談と申、次々扣へ
罷有通しやさんやと窺へば、何にもせよ詮義の手筋と有からず遠慮
に及ばぬ是へ通せ、關の戸へ先奥へ高雄太夫を同道仕やれ、十郎兵衛も
早歸れ、勘當玄ても主の内、願ひ又来るいまゝ有事答よみがへに及ぬそちが身の
上用事あらば重かさねて聞ふ早立と、そこやらにこちる詞の玄めくりす
ひく、立て行姿見やる女房も奥の間へ玄ほれし枝に、うく露の身えぞ
えられて咲花さきはな、名よし藤屋の伊左衛門馴なまし屋敷も改めて白瀬しらねにこそ
り畏る珍かわいらしや伊左衛門、互の無事へ語るよ及ず、何へ差置詮義の手が
かり、殿の災難此身の難ない、ナシ共能玄つたり、シテ其方が手がよりと
いが様の筋成ぞ早くいへく、ハヤキお氣遣遊おもてんゆべす、其れ尋者が知まし
た、何尋者が玄れたと、シテ其者の有所の何國假名實名何とく、ヤ外迄
もあく鞍原狂さきはらひに殿様のお名を汚おがせし大罪人おほざいじん、則私でござりますと、

思ひかげあき詞に不審、一ぱい晴ぬ小野田郡兵衛、大口明て高笑ひ、様様のやつがうせて、太切あ詮義の腰折ヤク佐渡平アレ引立と呼へれば、はつと答て立出る顔ハ互に見て、惄ブツりヤアありや、諒原アレでないこの佐渡七シ、がの幽八ヨウハチと云合せ、此伊左衛門を殺さんとせし其方が爰ヘぞうして其形ハどいへれてきつくり郡兵衛が、志らす目の内眷込奴ミツヅタサマ素町人め慮外シラフ千万、一合取ても武士の家來、たいことやら、鼓ハラハラとい名を付るうぬハ何やつ、見た事もあい毛二才め、主人の意ハや、きりく立ヒシタお侍のハ家來あら、猶以て詮義アモニキが有ア細言アモニキいはずと、うせおれと肩口取て引立る、櫻井主膳ヨハシイムサシとハめ、殿カミの名を銜カタナリしとや出たる大切の科人其儘にして次へ立、主膳様扣ハシメへ召れ、主君の渉意ハシメ背かねと其元の差圖シダヅへ受ぬヤア已中間風情ハタハタのざまをして詞を返す、慮外者、早く立てうせおれとはつしと投る火入ヒノスのさそく頬チにべつたり石灰カスも染る血汐カツシロハ十郎

兵衛か返しとおらぬ短氣の奴刀のこあ口といむる郡兵衛佐渡平下れ、
疵きずに受ても苦しうあい定九郎殿と諸共み歸れく、何もかも此胸むね_にさす無念をこらへ旅宿へ歸れ、安やとゆて是がハテ歸れといひ、早うせふと、
きめて歸すれ主從の胸の一物向ふ疵きずにり押ぬぐひ立歸る、櫻井跡を打
見やりア伊左衛門そち一人があざみも有まい、何者なに頼まれしそ、包ま
ず明せと和らかみとれるゝを汐しおににじり寄よ隠隠しても隠されませぬ、元
の發おきハ蓑原よしはらの名さへ色有高雄迎振袖あつおれあれを天晴あま、器量勝れし太夫職、
ちよつと見初て夫おの夢共あく現にも、只忘れぬ其面おもてざし思ひ出す程
猶おもふも、任せぬ此身の町人まちにん、高雄たかおにもせよ誰だれにもせよ、太夫と名が付
きや大名道具、町人風情がいか程に金銀つんでもけがあ事買事あらぬ
が廓くわの捉叶つかひのぬ事ことよ骨折ほねすと儘まことにと思へど儘まことにあらぬ、戀こゝせ物心の
外ほかと思ひ付たる大名出立玉木衛門之助様と言ふらせし上からい手討

にあふれ覺悟の前、是を外に露いさゝか上る詞あり、一時も早く成敗あされ、傍不審かゝりし譯偏に頼奉ると命を塵と投出したけいせい狂ひの白狀の様子、有げに見へにける。郡兵衛一と聞すまし、そふぬかえや違も有まい、暫しも主君を苦めし、其首刎て説明ふと立上るを先と暫く、彼が成敗を貴殿にさして、此主膳の何を以てやひらき仕らん、差圖を受し拙者を指置、其元が手討にして、又もや我に誤り付追失れんほ所存か、そふでり、あいと思さべえばしが中奥へござつて、休息めされ、彼にもとくと覺悟させ、せめて、念佛の一通も唱さするが未來の爲、ふとふ成と勝手よ召れ、えべらく奥で相待中、ぶち落して仕廻れよと、理非を糺さず殺したがる詞の意路の夕霧に、叶ひぬ戀の意趣ばらし爰で持込立て行、といえらすして櫻井主膳、身を失ふも戀といへど、惚れ斗にかるくと一命捨る其方あらず、御恩有殿様の難義と聞付て、科あき其身

に拵し科人と成志、御主人にも、熙浮満足、併此度の事斗ハ誠の科人の立
る、迄ハ、^{アラハ}疑深い主膳様、惚た印ハ互の齧紙、高雄の方から送し起請是
見てたべと懷方、取出し渡す紙包、其儘取て押ひらく、内ハ白紙に卷添し
小柄を取て見て、^{ハズ}此小柄こそ先殿のお胤を懷せしむ必へ、後の印
を給へりし三疋獅子^{ビカシ}家の定紋、^サ惚たと申ハ其小柄^{ハシ}是を所持せし
方ハ、先達て此屋敷へ、御入有し高雄様早々是へ浮出と、呼れてはつと
關の戸が傳申先殿の姫も今更改る主從共に深切の嬉し涙に父の恩賜
を思ひ忍び泣、主膳異義を改て、先殿^{ハシ}死去の砌^{ハシ}、お前様のお行衛を諸
所方々と尋れ共、今迄しけざる主人の浮胤^{ハシ}、^サ私も爵を承へつており
ます故、惚たと申も其小柄、葵原に置まして、お家のかきんと存るから、
惚て、^{ハシ}惚ぬいた太夫の身受、大名の名を銜たる入譯くどふいへねを
主膳様、御得心あされたら、一時も早く御成敗^{ハシ}死で玄まへバ事濟と、^{ハシ}

ぱりとした男ぶり、隠れ浪花の夕霧とつがひ離ぬ蝶との、花に飛かぶ中
あらん、櫻井主膳かんじ入殿のか胤を談原にて傾城遊女と云ふらさべ
家老を勧る我まが誤あやま、其誤あやまりを隠したる其方あれば、助置たき者あれ
共、郡兵衛を始つとし、高雄様を先殿のお胤と云事、我口おもろ露顯あらわして、上へ
ぞふも打明られぬ、さすれハ御前で受合た、紛れ者の詮義を正し、主人の
明りを立るが第一、不便あからも伊左衛門、覺悟せよと云放せぞ心ハ健
氣きとかんずる涙、姫も涙の顔ふり上あがり、帶おびいとかねませ自みちの情を受し伊左衛
門、只一言の禮もあく又わし故ゆゑ殺すと、余り氣づよいぞふぞまの
人の命を助かへりに、此高雄、迎も一度ハ談原に濡ぬれし此身を今と成な、大
名の小姫様こひめさまと、ふつづりいふて下さんすあ、やつはり仕付た道中みちがむし
や嬉しいと、どこやらにこもる涙なみだの一筋に落おちて流ながの、身みにぞしる道みちと殿
の御胤おねと、背撫せねさする、闇の戸戸が又も、じくれ合時とき伊左衛門、最期さいごを立

らすくれ六ッのかねての覺悟奥庭へ我也用意と立上り姫を伴ひ入に
ける、待々待たる小野田郡兵衛刀提奥方立出是の内室、主膳殿又は伊左
衛門めが首打めされたか何とてござる、イヤ關の戸殿人サと斗物いへし、あ
ぜ御返答めされぬと重かけたる一間の内響太刀音、關の戸が胸にこた
ゆる夫が聲科人、伊左衛門が首不便に存すれど殿の名を銜たるお家
の爲の大罪人、御覽あされと首桶の、ふた押明て指出す伊左衛門より似
ても似ぬ何者の首、伊左衛門めに何と召された、驚ハ断、此首こそ
佐渡平にかたふを忘たる競組の團八とす者褒美のわけ口賛へんと僅
く金よ目かくれて貰に來たへといつが不運思ひ斗て某が裏も廻して
此通何か何と、知るまいと思召か、最前歸つた佐渡平め、伊左衛門と顔
見合すやいあや互に驚其座の摸様聞合すれば段原で殿と思ふて切込
だれ、伊左衛門より大事の科人ヤだまし召れ、佐渡平めに國元を召遣

た身共か家來、そふれいへさぬ、夜前此地へ當着召れた其元、其又家來の佐渡平が、伊左衛門とハ何國で顔を見受ましたあ、サ夫ハ、たつてあらがひ召るゝと、追かへされた奴がかへり、自分に毛詮義がかゝり、切腹召れずば、成りますまい、そこを存して此所へ、折幸あ此首を、藤屋伊左衛門と名を記、科の次第書顯へし、鈴の森にて、獄門にかけ死骸へ、則京都の親元へ送届る上から、伊左衛門へ死たる同前助て殺す拙者が政道達變へざらバ、此首の科を顯へし乍上ふか、サ夫ハ、何と違背へこざるまいと事を納る主膳か情、小庭に聞ゐる伊左衛門、亥ほくとして手をつかへ、お志へ有がたけれど、若匱物と此事がお上へ知れば渉身の難義、其義ハ少も氣使あし、お咎有ハ汝が次第申開きの胸み有、と云あがら伊左衛門假にも成敗したる身の、此後幾とせあがらへても、藤屋伊左衛門と名乗がいあや、其時こそひ見遁あらず、打て捨るが撻の第一、高雄大夫か

身の上の某慥なつかより預つたれり、そちが頼みし親元へ急度渡してくれんす
と余所を憚る、表向首桶たづさへ立上り、郡兵衛殿も其儘御前へ、御苦勞
あがらと挨拶に返答へんとう志かあるのむ志やく志や腹當り眼に角立て、家來共
伊左衛門めをぼいまくれと呼ひる聲も割竹の情用捨しおきもあら志こに追ま
くられて伊左衛門名計消て生殘る姿吊とざるふ親里へ、立寄事も渚の千鳥泣
音不便びんと見送夫婦必ぶじでと一言もいふにいられぬ關の戸が今ぞひ
らくる櫻井の色香争わらそふ難波湯まほ名も夕霧ゆきに逢坂や志るべの方へと「行雲
の

第三

下總と渡わたせる橋はし、兩國の國境をパ名よみ呼し、橋のあいろも見へわかず、
猶降さがしきる夕立のしのを乱せる雨の足、夜目よめも夫と蛇の目傘がさ名あち
ぬ工の二人連、兩國橋にさしかかる、ヨレサ佐渡平郡兵衛殿の頼よ寄りしめ

し合せし今宵の手番、主膳が歸るへ此道筋、有無を云はずたつた一討、^{アタマ}定九郎様聲が高^{ヨウ}私も腹から町人でもあく刀さす譯も知ておりまし
たが、二親に見放されせふ事をしの奉頭持郡兵衛殿の目に入て一大事
を頼れ、おのれやれ此役目仕負モハフサてくれんずと思ふにたがふ義原のじだ
ら殿で、あふて伊左衛門をむ三しくじりしてのけたと、思ひの外答ドガメ
あく佐渡七を其儘に佐渡平といふ仲間が是といふも郡兵衛様のかか
げ、お禮に、主膳めをすつはりいひしてしまふたら、云ふにや及ぶ上
分別セガシ某櫻井が組下クムシタといへど國元に有し時郡兵衛殿に心を寄兼て主膳
が預居る殿の重寶國、次の刀、人知らず盜取渡し置たる今日迄も盜まれしと
云評義もあく彼是もつて心へがたしきやづが心底をふに及ばず殺す
か近道、合點か氣つかひ有ると兩人が點頭チカツフ聞く其内に雨もふやめ、
傘かたむけ、今や遲オヤシと待めたるかくとや様子しらぬ共虫が知すか十郎兵

衛の主人の歸り待わびて勘氣の願ひせん物と心當とい橋の元待共知ぬ
くら紛れ傘はたと行當りハジア御免と云ふて行過るうろたへ奴がたん平
物主膳やらぬと切付るを落たる傘ではつしと受詞そふいふ聲ハ仲間佐渡
平主君の名を呼切付たハ思ひ違ひの油斷させ此十郎兵衛を殺す工か
何にもせよ心へぬ胸に有事まき出せと拔身刎られ佐渡平が星をさ
れて返答もやぶれかぶれと性根しきねをすへ様子知ねば迎もの事ぶちまい
て云て聞さふ高い主膳を待受て殺しておまふこつちの思案思ふ圖へ
來たうぬが不運主も家來も生てハ置ぬ觀念くわんひろげと又切刀、てんがふ
すあと引つかみ身うごきさせぬ後より只一討と定九郎がだまし寄て
切かくるを持たる刀で丁と受受一人ならず二人迄誰ぞと思へハ山口定
九郎殿さんこあたも主人を殺しに來たか、推量の通り佐渡平を玄めし合
せ待ていた此道筋じわれから先へ玄まふてやる叶ハぬ腕立取置と佐渡

平諸共詰寄れば、あら氣へ返つて主君へ不忠、一旦詫るに志くへあしと
思案を極め、兩手を突く、理にもせよ非にもせよ意趣^{じゆ}遺恨^{いん}のまゝ有習ひ
是辻もよつ其如く主人に恨有^{うらみ}、寄討^{うそと}んとねらふ今宵の^{さう}、無理^{むり}と
さらく思ひませぬ去^よあがら。我辻を勘當^{かんとう}の身分、何卒主人に侘云^{たて}
最一度家來と云れんと思ふが故の賴より外に何と露程^{あらこ}も惜からん
此命^{きみ}、主人のかなりに今爰で^{そこ}一分様に刻^{とき}で成共ふ二人の御存分^ご、手
向ひ致^{むか}さぬ^な十郎兵衛が心の内を思ひやり、せめて^へ武士の忠義を
バシ立させて下されど、投出す命主の爲塵^{ちぢり}共思ひぬ兩人が手引袖引膝
をつき、忠義の胸の眞實心^{しんじやうじん}、思ひやる程殊勝あれ^{すこしづつ}、十郎兵衛主膳^{しょぜん}がかへ
りにわれを殺したらそつちの勝手^{かわ}へよからふが、夫で^はこつちの工面^{こうめん}
が悪い、われが主に忠義を盡^{つく}せばおれも又主の云付^{いづけ}手向ひせず尋常^{じんじょう}
に臺座^{だいざ}からうほうり出せやい、そふじやく、主膳^{しょぜん}が替りに死たがる

わかれら、仕まふてやろかい、其段の尤あれ共始から云通手前が
命を捨る替りナヨシをふぞ主膳様のお命をナアラぬハアあらぬ所を聞
入るか武士の情じや、ナ定九郎様、是佐渡平殿十郎兵衛が手を合して、一
生ヌ一度の頼、是拜ます、頼ます、ナ、是ナ頼ます、くく、ニやかまし
いわい、頼ます、くくとくらがりでかびかくやうに、何ほおどがいた、い
てもそんあ事聞耳持ぬ、辱の明ぬ事いハふかとつと、早ふくたばれと
蹴^キ上る足首志つかと取^{ハリヤ}、その様に云ても傍主人を、ナ、くどいぐそふ
いやこつちも百年めじや、主人の仇と成儕等^{ナリヤ}もふこつちから生て
おかれぬわい。面白い、そふぬかゑや身が有て相人^ス仕よい忠義立に
死たくバ望^シよ任せ殺してやる定九郎が刀のぬんだう受て冥途へつつ
走れど、切込刀かいくぐり、鏃元むづと佐渡平が、同じ抜身の稻妻^{ハシタツ}や、又も
降くる雨につれ、空もひらめく稻妻の光りも幸十郎兵衛が、二人を相手

に根限り目さましかりける、勧に定九郎佐渡平遜支度、何國を當と正脉
も轉つまるびつころくく、起上る定九郎が脇腹ぐつと氷の及ぼう
く遜出す佐渡平が肩先丁と切下られ、うんと計に倒れ伏肝先ぐつと
といめの刀空晴渡る、橋の上見付る主膳に見合顔おほあわ、お旦那にハ只今お
歸り、何者かと思へば十郎兵衛見れば人をあやめし肺口論あるかい
かにハツアある程、推量の通、郡兵衛の賴に寄り定九郎佐藤平とゆ合
せ、此所に待伏してお前様を殺さん工おとづれ悪いやつと存るから兩人共にま
つ此通只今といめ致せし、と聞る主膳大に驚き、其兩人こそ某それがしが詮義
の種たねを成べきやつ去によつて我屋敷で追跡せしを其儘に捨置たるハ深
き所存、伊左衛門が云しひと吉原での狼藉らわいを思ひ廻せハ小野田郡兵
衛重かさある科人の詮義の元ハナレ其佐渡平引そらへて白狀させん
と思ふた恩案も皆はづれ、やつぱり我身にかゝる難義なんぎ、しあしたり殘

念やと、悔を聞て十郎兵衛居たる所をしつゝざし、下主の智恵の跡の
悔か前様のお命が助たい斗でさやうの所へ氣も付ず殺せしハ我誤是
も何故渉主人に勘氣の詫の種にもと極めし的も又それで此身に當る
主君の罰真平罰免下されど落たる槍を拾ひ取りつゝ込んとせし所櫻
井暫しと押としめ此儘死るハ犬死同然今の命を存命て一ツの功さへ
立るならば勘當赦して元の主従そちへ心ひ付ざるか狼狽者めとも乞
取刀。私が一命をかべい下さる渉主人のお心へま、主従とある事も深
き因縁。武士の義理にて捨たる其方功の立様よつゝ聞殿の重寶國次の
刀代々預る我家筋過つる霜月廿六夜例の日待と一家中招寄たる其夜
も紛失して有所知らず慥々夫と推量ハしつれ其是といふべき證據もあ
く忍びやかに詮義せんと思ふ折から小野田郡兵衛佐渡平より付殿を害
せんとせし極悪人今打明ぬも國次の刀の有所を聞た上と手延にせし

ハ主膳が越殿、今更云て返らぬ事、力と成ハ十郎兵衛舊恩を思ひあべ、命にかへて刀の詮義夫もあがふハ延されず、三月三日ハ殿の誕生、かさる吉事にはづれてハ櫻井が家の大事と有て我手でハ吟味もあらず、主持ぬ身の氣さんじハ誰憚らす詮義せよ、此役目さへ仕裸あべ以前にかはらぬ主従の約束返せぬ證據ぞと、一腰ぬいて指出せバ其儘取て押戴き、盡ぬ主君のほ一言、こたへくし四十四の骨々ハ碎る共奪ひ取たる刀の有所詮義の手始御覽有とのたれふしたる定九郎が懷中さがせバ紙に入れたしむ金子ハ十郎兵衛が肌に差つかと用意の路金マレ待十郎兵衛、金子ハおろかちり一本取かすめてハ忠義にあらぬがう御意でいござれ共主君の爲の切取ハ武士の習ひ、盜賊銜と身をやつし、盜の手本ハ五右衛門の銀重郎と名も改め貴人高位の門徒を只人知ず刀の吟味拙者が胸に覺の手の内そつ共氣づかひ遊ばモあと主命重く身に受し、阿

渡の海賊十郎兵衛が盜賊街の始りハ斯とぞ思ひ知られたり、主膳傍に心
を付、二人の死骸此儘々討果せしと云ふらさべ、咎も有べし去あがら人
の見ぬ内影かくせはつと斗に立上り、何れ吉左右致す迄必々済短慮かうらす、
し、何が扱我連も隨分堅固で便を待ぞ、おさらばくと双方へ立別れ
んとする折節郡兵衛か下部を見へ主を迎ひの箱提燈打消主膳十郎兵
衛の行方玄らず

第四

浪花津にいづれハあれど取わけて、分限長者の寄所、今橋筋の軒あらび、
其名も邦屋三郎右衛門と人に玄られし家がらも夫に離るゝ不仕合商
ひ、万事不手廻りに今ハ世間をひとつそくの身ハ氣さんじのニツわけ娘
一人を蝶花と外にあがめあかりけり、春風に裾吹そらす取ありハざ
るがら武家の奥方と一目に、玄るき供廻り、若黨中間徒士の者其外笠籠

狹箱三郎右衛門が表口案内乞て立やすらふびしを躰に後家おまき
番頭の庄九郎連て戸口に手をつかへどあたかへ存ませねどお歴々の
お女中様の用あらば先よあれへど詞にこあたへ打通りついに逢ねば
不審の尤去あがら氣遣ひめさるゝ者あらずわし事ハ阿州の家中安松
數馬が女房弓といふ者と聞いておまきが手をつかへ是へく思ひも寄
ぬ夫三郎右衛門存生の時ハ殿様の用を聞敷馬様にもお目かけられ
お心やすふお屋敷へも毎度お出入御厚恩に預かつた敷馬様の奥方様
當地へか越し夢にも存せずおし付だらけも女子の身お赦し遊べして
下さりませ庄九郎そよた成共袴羽織といふをとめて其儘く此
度殿の浮用に付夫敷馬もお屋敷迄罷登たる幸の事と思ひ夫へ願ふて
京内参りいへゝ恐びの事あれば姫はしたも遠慮いたしげふれ町方見
物のついでがてら身まかられし三郎右衛門へ念頃も有た故立寄せ毛

夫の差圖、必々心遣ひ無用ぞといふ内用意の狹箱明て家來がそれく
に、直す手土産目錄書戴く手代が押開き、羽二重一疋、おまき殿白縮緬一
卷、御息女へ郡内縞一端、支配の手代へ其外家内へ金子千疋、是ひまあく
お冥加もあい、家内の者迄つゞくのお心付、お禮申しや庄九郎、く有が
たう存まず、私へ此家の番頭でござります、済用もござらばお心置あふ。
あまたとやせり爰へ端近はなづか、それく見ぐるしく其奥の間へ暫くお越
下さりませ。いざほ案内とす、められ然らば暫時お茶のほ馳走外にお
世話へ必無用とおまきが案内に伴て一間へ入て庄九郎御家來業へこ
あたへど、皆打連て勝手口のれん押上入よけり俄のお客又家内の騒さわぎ
お菓子たべて益豆腐ほんとうふとてこい八百屋へ走れ、此肴屋へあせ遅いとわめ
きちらして庄九郎臺所を出来り、抜いそがしう成てきたへついお茶漬おちゃ漬
を上る、献立せいといわれたが、何てあらふぞ、向ふが猪口いのしのにこんよ

やくの白あへかい、そして汁がべくち汁平の狗脊と油上こりや念佛讃の料理じや、こりやおれじやいかぬ、最一度魚屋を呼みやれよと勝手口から奥納戸差覗きく小點頭してそろくと戸棚の前へ立かゝり、紙入から相鑑と見えて、錠まへ手ばしかく引出す財布の縞黄金五百兩のかか目から、お弓が見る共志すまし顔懐へねぢ込押入跡取縞ふ折からに、何心あく娘のお辻、庄九郎そこみか嘆様がお呼あさるゝと聞いて、惄りうろたへ眼、ヤ庄九郎へちよつとぞこやら參られました、あの人の何いやるやら(そあたに料理の事を云付ると嘆様が呼でござる、そんあら何にも見やあされませぬか、まあ夫で落付た料理の事あら八百やと魚屋にとつくりと云付たれば、氣遣ひへござりませぬ、いつ見てもく美し可愛此腰付申難面ぞへく、お前の事を明てを暮ても暮ても明ても晝へ終日夜もすがらお辻様くくと、重ね戸棚をふんばる

ので、中山へ日歸りに玄た程足に實がいり、其草臥で寐た間ばかり、夫よ
り外に忘れる隙ひへござりませぬ、名を呼でさへ日本國が一所へ寄やうあ
に、顔見て是がたまる物か。湯らふじませ、天狗の面を風呂敷に包だや
うで、ふもあらぬといだき付、玄あだるゝ手をもぎはあし、これく
又玄てもく、あたいやらしいけがらへしいわしよへれつきと玄た云
号ひの殿様が有ぞや、あじやらも手合てんごも事ことよる重かさねて仕しやると、嘆なぐ様にい
ふぞやと、恥はずめられても構かまぬあつ皮かわ、云号くといへ玄やります
が、其云号の男おとことへそりや、誰でござりますな、忘れた事、京に隠れのあ
い藤やの伊左衛門様さま、こりおかしい、伊左衛門殿様へしあしやつたとの
世間での噂、夫をお前も能知て居てからよし又伊左衛門殿が生て居や
しやるにもせよ、可愛かわそふよ庄九郎が思ひ詰つめて居る物を見捨て、直に嫁
人嫁、大身代しんしろの伊左様さまと榮輝えいきが玄たさじや皆欲よじやと、お前様を悪あくふい

ふぞへ、お主様を悪ふいりして、第一番頭の顔がよびれる、悪い事へい
ぬ、わしがする様に成るされ、こんなよい首尾又とあいといやがるお
辻を抱きめく、しあだれ迫る眞中へ、いつの間にやら別家の手代助右
衛門ヲ、よい所へよふかじやつたと憇ぶか辻庄九郎ハ折角入た居風呂
の底のぬけたるごそくあり、夫と悟れど助右衛門わざと何氣のあい顔
付キ是ハお辻様庄九郎二人あがら爰に何してござりますぞ、いふに娘が
涙聲ヨレ助右衛門聞てたもあの庄九郎がいやらしいわしをあぶりくつ
さるといふを打けし、ゆくわたしや何よもいや致ませぬ、お前が芝
居唄シテをして聞せとおつしやる故、三五郎と金作が色事をちよつと仕
形カタで嘲コヤした斗コヤそりやそふと助右衛門殿こあたハ京へ登のたと聞たが
いつの間に戻アマらしやつた、夕部夜舟に戻アマつたが夫ハよ付キてお家様ハお
目にかかりたいとこにござるぞい、お家様ハ奥にじや、用ハ有アリら呼

でこふといふを此場の立沙シタふ、玄ほの目ませと仕形にて、必何にもいふ
まいと娘をあだめ番頭ばんとうの奥の、間にこそ入にけり、跡シテの玄らけて、暫く挨
拶さうさつをあき後うしろの方方^{カタ}、助右衛門戻りやつたか、大義で有たと母親おやしの庄九郎
諸共奥おく立出だきだしさつきにから聲が玄た故さうぞう早速逢ふと思ふたれおもふ
めづらしい阿波あわの傍家中安松敷馬様の奥方様、大坂御見物の序じょあがら
お尋に預つて、シテ挨拶やらかとぎやら久しうりの屋敷付合、夫おとこへ思ひも
寄ぬ珍客ちんきゃく定て何かお心遣ひ、まあ早速申ませう、京都の様子藤屋の家
の騒動さきどう伊左衛門様の事ハ傍病死共、又生うてござる共取シテの風聞ふうもんにて、慥
あ事ハ知シゆさずと、聞て娘も母親も又今さらの憂思うしひ傍そばに差出さしだする庄九
郎ヤ伊左衛門殿の事ハら聞合きみあすよ及べぬ、死しこあれたが本共ハ根元ねんげん根
本ハ偽うそりあしの大誠おどろびやし病死びやうしきといふハ皆嘘うそで、ほんの事ハ阿波の殿の名なまを街かた
何が江戸の菱原で太夫おとしを揚説あげづれ段だんのほたほたへが過て十二月の饗應夏

雪ふりの脉をゑたとやらが江戸中の大評判其ばくか阿波の殿へかゝつて夫で伊左衛門殿へ阿波の屋敷で成敗せいかいにあられたを、一家衆が隠して病死にして仕廻ふたとい、大坂中に誰ゑらぬ者があつ、まゝよい事へあのお辻様をやらあんだが大あ仕合此上このうえ結納むすびなを戻してさつぱりと他人に成てお仕廻あされませ、つあがつて居たらざんあ難義なんぎがかゝらふもゑれぬ、お辻様おつじやう一人子の事あれば内へ聟むすき取たがよござりますとこぞ爰らによい聟むすきが有そふあ物じやがと、己が勝手へ引かけて云廻すといふらぬ母おはないか様是これ庄九郎のいやる通り、世間の取ざたも悪い伊左衛門殿、殊に生た共死だ共ゑれぬ人にべん〳〵とつあがつて居よふより結納むすびなを戻してさつぱりと聟舅むすきゆうの縁切が上分別と、母の詞に悲しむ娘むすめそりや嘆かた様何いひゑやんす常つねお前のゆ意見ゆいみに、女ごへ其身一生に殿おんひへ一人持物ぞつまと定まる其人ひと女郎妾めいわらわの色狂ひ、腹の立事あら

ふ其格氣かくきえつとの氣を持て隨分夫を大切に、もしもふ縁縁でさられてる。又の嫁入せぬ物といへえやんしたをわえや忘れぬ、枕まくらのかへさず共云号いひなづけすりや定まる殿おんは、其夫故ゆゑの様ようあ難義災難なんぎさいなん有あつても娘むすめ故ゆゑじやと諦あきらめて、必しく夫婦の縁縁切きてばしくださんすすあ若わかえあえやんしたが誠まことあら、わたえや此儘尼あまごに成なつ外の殿涉おんぢゆいやくと誠まことを守まつる娘氣むすめきに母おやもとからうを涙なみだぐむ、助右衛門すけざゑもんも目をええたた、さきさき、涉辻様おとつさまようおつえやりました、人の誠まことのこんあ時ときが肝心かんじん伊左衛門様いざゑもんさまの生死せいじの鬭たたか斗たたかで知しぬ事こと、一旦云号いひなづけを變改へんがいするる水くさいといふ物もの、あつちあつち至極しき深切せきに、こつちの身代みしろの不勝手ふしようじを察さし、五百兩ごひゃくりょうといふ結納めうのうの印いん、今云号いひなづけを變改へんがいすりや、まま其金かなから戻もどさにやあらぬ、差當さつとうつて是これが迷惑めいわ、これ助右衛門すけざゑもん、急事きじにかゝつて家の爲ためにあらぬ事こと、此番頭ばんとうの顔ほおが立たつぬ戻もどす金かながおしくば其金かなれ、これが工面こうめんして出だす、金づくで娘むすめに難義なんぎかけぬまか此金かなを戻もどして

さつぱりと縁切て仕廻しやりませど、取出す以前の五百兩我金出して
主の力に成何と、こんあ手代の有まいが、家の爲あら命も惜まぬ、お爲く
と誠を見せ娘を女房に跡式迄してやるお爲ぞ醜しきおぞろ、二人あがら我
を思ふての心づかひ、嬉しいといへふか過分おほぶんといへふか取分て庄九郎、
五百兩といふ金才覺してたもつた段、一入嬉しい添い、近年屋敷方の金
ハ戻らず逼塞びつそくの身分あれ共娘が一世一度の嫁入、其結納あわせより貰ふた金を
の様あ術じゆあい事が有べ迎めつたに遭ふてよい物か、其時の封の儘取て
置たを見せませふと戸棚だなの傍そばへ立寄て鑰かぎ取出し錠押明ちやうめいア結納に貰た
五百兩の金爰にへあいと悔りを聞ておぞろく助右衛門、庄九郎も空と
ばけ、俱に立寄上を下尋さがさせをあらかねのの、錠前も損ず盜人の業共見
へず、若置ちがへいあされぬか氣を玄づめてとつくりと思ひ出しては
あうじませど娘も俱に氣を付れば、いづれ金銀きんぎんの太切の物ものもれど、も

けて大事の此金をわしが部屋の此戸棚へ置忘れう様があけれど、三度尋て人疑念の爲じや藏の戸棚を尋て見よふと立上る。藏迄もあし其金へやはりそことに聲かけて立出る。數馬が女房庄九郎がとがり聲で藏へ行に及ばぬ、其金がそこに有どひして、五百兩の金へそこにござります。外迄もあるし、そちが出した五百兩が則戸棚に有た金、何玄や是が戸棚に有たの玄やコレ是への、わしが在所へ云てやつて取寄た五百兩夫が戸棚に有たどひ、あんだらくさいばか盡すある。在所といふそちが所へ、但馬の豊岡、其豊岡への道矩へ、大坂から四千里余り、日數に玄て幾日程みて戻らるゝぞ。急いでいても行戻りで八日程からふかく、最前から様子を聞に結納を戻さふ戻すまいと評議の有たひける事、夫に八日もかかるそちが在所へ送ふして金を取にやつた。伊左衛門とやらの死ある事、そちやまへとからよう志つて、夫で其金

取寄たから、横道者めが、盗だ様子有やうに自狀せいときめ付られ、さつちりつまれをひるをぬ悪者あくしゃかへつた所へ出立やべつて、かへつた世話をやく女中、一駄伊左衛門といふやつれどら打のお大將、大坂へ来て新町の夕霧といふ太夫にあづみ、幾日もく居續よがの馬鹿者、そんあたわけに大事の娘御を添して、末が詰らぬと思ふて、夫でとふから取寄て置た金じやが、夫が何と云た、人聞の悪い盜人じやの自狀せいのどり、又わしが盜だといふに、何ぞ慥たしかあ證據しゆきでも有かず、證據しゆきへそちが胸の内に體に覺の有盜人よとうじん、とりやかかしい、わしが胸の中に有、據證夫が爰へ出して貰ひたいあ、かう成て、わしも身晴はれじや、侍の女房じや、遠慮おんりよあい、をふすりや胸の證據が出る仕様しじょうが悪いと歎さぬと摑つかかる庄九郎が、小がいあぐつと片手又ねぢ上、攘ぬぐさをして紙入取出ししり助右衛門すけうゑもんとやら、其内証義を投やる紙入押開ひきき見れば内うちより疑かね一ツ、合点あてが行

ぬと戸棚の鎌に合して見れば玄つくり相鍵ヨレほんの鑰カギ此母が腰に
放さぬそりや相鑰ても横道わきぢあとあと転ころる主従しゆぞうお弓ゆみの猶も手をねぢ上あが主の
難義なんぎを救すくいん爲ため主の金を盜ぬすんたれば忠義共ともいふべけれ共ともこいつが心
いそふで、大まいの金を盜取ぬすが才覽さいらんした顔で夫から付入其そのお辻
を女房にして身代を丸取にせうといふ悪工だくみする番頭殿ばんとうでん此内に置れ
まいと庭へそつさり投付なげつけば娘が悦び母親もおやし犬に手を喰くわる恩おん玄ら
ずの横道者わきぢしゃ隙あらわくれる出てうせふと、いれれて何と庄九郎よしや、あたぶの悪
いゑくじつてのけた、憎にくいめ覺てけつかれよダメ、いたいおさ
んの都の町まちであちてわれよと口へらず頬ほほを玄かめて出て行跡見送り
て母おやの手をつさああた様さまのおかげにてふ時の難義なんぎを遁のがる、仕合むけあ娘も
ちやつとお禮申玄や、ほんにわたしど玄た事が最前から渉挨拶あわいさつも、おか
げでうるさい病の根ぬけ、お勞休めにな嘆なげ様さま、それく奥の間おく之間へお供

して無重寶あそたの琴でもお慰に夫の段を心遣ひもふか暇と存す
れど左様あらば今暫し御馳走に預りませふと座を立上り娘の手を取
鶯ヨウ入たは此息女貞女兩夫にま見へすの教を守る心さし器量といひ貞
心といひ武士の妻又も有まいそだちと子を譽ハサムられて母親の心いそく
助右衛門、聟殿へ戻す金元の所へ入ておきや、そんあらとふでも此金
をハテ變改するも娘が可愛さ、先様へ戻さにやあらぬ大事の金戸棚へ入
て奥の間へいさ浮越と母娘伴ひ奥へ入にける跡に残つて助右衛門金
取納たばこほんきせる相手に獨言ハシメ日比から義理を立人を憐む母浮の
氣質、夫に似合ぬ結納の印戻して變改せふと有の義理も構へぬ浮了簡
又娘浮の心へきつい物ぞや、そんあ難儀かかゝつても一旦定た男あれ
ば外の男の持ぬとてうそ忠臣蔵の小浪が様る心じやの、そふで此
云号イミダツギを變改さぬ仕様が有そあ物じやが、と心一つにとつ置つ案じ

るこあたにハ客、又饗應の琴の音、重扇の風かほる、匂ひをつとふつたか
つら忘れぬ人の今さらみさらぬ、別れの玄やらせけも、やがて結むすへぬい
れた帶たすきつい引玄やる琴の哥でもとかく夫を玄たふ唱歌、若伊左衛門
様の病死が本の事あら、いとしやあの子の氣違ちがひにがあら玄やるであ
ら、せふしてありと夫婦にして玄んせたいと、思案小首かたごも傾かたむし、日のめ
まばゆき深編笠浪人と思しくて、おはを枯かづせし身の廻り案内もよく打
通開く絆屋三郎右衛門とい爰元さざなわ在宿あらハ涉意得たいと聞て居直る助
右衛門、とあたから存ぜねど、成程三郎右衛門宿すくは是でござれと、旦那義
の死去仕り則我等支配の手代渉用せうようひさらば私にといんぎんみあしら
へば、支配人と有し亭主ていしゆ同前致ちゆうぜんし召れと上座じょうざひすへり、御意得たい事
別義で、見らるゝ通我等義の尾葉おのばを枯せし浪人者、知縁ちえんの者の取持
にて、播州のお大名へ召かへられ近ちか出勤致す筈はずあれ共何をいふて

も此風駄、身の廻り何かの揃そろへ少々金子入用に付此家へ無心に參つた
のさ、暫くの内取かへてくれられふあら、過分にあらんと、押柄おさげにいへそ
とあたへ律謹りぢき者、夫おへ近比ちかお氣きのとくあ事ことあがら、只今もや通ゆき、且また那相果
支配しはい人の私、金銀の事ことへ心に任せぬ事ことあがら、御浪人様の御出世の筋と
有あり、無下むげにあらぬ共ともされまい、ア其金そのの何程なんじょうの事ことでござりますいりあづ、僅すこ
五百兩、夫程有ある當分夫とうぶで事相濟あわせといふにこあたへきよつと忘うつて、ア五百
百兩ひゃくりょうとおつえやるあらわ、小判こばんの事ことでござりますいりあづか、成程なるべく小判五百兩ひゃくりょう、いへ
少すくないの事家じけがらを見かけて參さんつた用立もちておくりやれといふを打うちけし
テ、ア、もう御意ごのあざれますあざれます、大がい物ものにハ程ほどの有物ありもの、御浪人ごろうにんの御無心ごむじん
よくで有あふと察さうし、二歩ふたか三步みか高たか一両いちりょう迄まであら私のわたし了簡りょうかんでと思おもひ
の外口ほかぐちみさへほうばる金高かなたか今いまひつそくの此絆屋しぶきや家の諸色賣代しょしきめいたいあし
ても何なにとして出來でぬ金かな所ところの明あぬ事ことに隙あらあずと又外ほかへ御出みだりあされ

とすつかりいへど動かぬ浪人、^{浪人}外へ参る所存あれば押付て是へ
參らぬ家からと云金の有事も存して參つた畢竟見ずしらずの我等あ
れば術^{かたり}吾思^ハれふが、高の知た金の事、術れたと思ふて當分用達てくり
やれさ、^ハありませぬ、術れるも用立も金が有ての上の事、盜人術の用心
にハあい程慥^ハあ事^ハあい、すりやどふ有ても、^ハ七く^ハいあいといふの
に、^ハ是非^ハに及べぬ、此上^ハちとお座敷を穢^ハしやど、居直つて肌^ハくつろげ
差添^ハするりと拔放^ハし、腹切用意^ハゆすりの兀頂^ハ夫^ハと^ハ志らぬ正直者^ハ
や、^ハどうや何事をあされます、^ハ放しやれ、所詮無心を聞と^ハけねバ奉公
の望も叶^ハぬ、此儘一生浪人せうより、切腹して相果る、夫^ハは短氣^ハあ
まあととむることあたへ、障子をひらきお弓^ハ何か繪圖取出し、引合す
と呼れてはつと^ハ云あがら爰も氣遣ひ立兼て^ハ、^ハ汝浪人様必早

まつて下さりますよ、又了簡もござりませふと漸くためて隔の襖を開け
べふ弓が小聲々成、最前方一部始終殘らず是にて聞たるが、あの浪人へ
阿波の十郎兵衛といふ海賊、昔の石川五右衛門にもかどらぬ盜賊、夫故
五右衛門の銀十郎と異名する由、子細有て此でとく繪圖を取て尋搜す、
此度夫の上坂じやくざんも殿の上意にて彼を捕へん爲の事、けふ斗はずも此弓が
廻り逢たも數馬殿に手柄させいと天の賜めぐらしア、添あや嬉しやく家來又
いひ付召捕めぐらしんと、勇立いさかを押おさめ、成程左様さうようあ事あら渡たま病の神で敵てきとや
らで近頃氣味のよい事あがら、爰いはの内てお縛しばあされましたら掛り合かわ成
て、若親方が難義致す様ようあ事ことひござりますまいかあと、氣遣きねひがればい
か様ようのふ爰いはの内で召捕めぐらしバ掛り合かわの筋すじへ遁の、夫をかべふて依怙おひき負おほの
さたもあらず、銀十郎を召捕めぐらしたケ様ようくと明白に、殿へ言上せにやあ
らぬ、其時の掛り合後家臣を國へ召るゝ定の物、まだ其上に科人の口

書次第でとんあ難義がかゝらふやら、そこを思へば近比氣のとくといふて手又入たあの十郎兵衛、見遁しての夫へ立ず召捕ての此家のあんき、争ふしたらよからふと思案の躰又助右衛門、左様も掛り合でお國へ召れて、女の事へあんき千萬、何とかう遊ハしませんか、とふあと欺してあの浪人をいあします、所を御家來衆に言付て門でお縛あされませぬか、私の親方にかけ構ハあいと申者成程尤併大抵の奴であければ、自由山に此家へいぬまいぞや、そりや致し様がござります、何で有ふとあの者が申通金かじていあします、此内をさへ離たれれば、家來衆があふ縛あされますか、そこでの金を此方へお戻しあされて下さるれば、あんきも掛らず済といふ物にてかした通上分別、然らば其旨申付んと、家來を密に小手招き、汝等の裏道より表へ廻り、こふくと叫き黙く相圖の手配、助右衛門の何氣なく勝手へ出てゆ傍浪人様迷惑千萬を傍無心

私の心で済ぬ故女義あがら親方に相談致したれば、お侍様の命にか
へての事無下よいや共いられまい、よい様に斗へと有故仰の通五百兩
専用立ませふ程に、専出世次第急度返済下さりますかといふにとあ
たも刃物を納（詞）、然らば拙者が望の通聞届て下されふか是れく過分至
極（ハ）、お命よ及ぶ事手前も逼迫難義あれどお取かへゆますと戸棚開い
て以前の金包（つみ）あがらの五百兩渡せば取て押いたゞき拙者が命助る恩
義、生々世上忘れ置ぬ心もせければ早お暇、左様あらばござりませうか、
お禮（ハ）重てさらべくと金追取て懷中へ表（おもて）をさして立てる、待設（まよせ）たる
お弓が家來（詞）、こりや捕（と）たれど左右（わ）、寄を蹴（け）倒しもんぞり打す、手練の曲
者持餘す家來が勧見兼るお弓、小づまを帶よしつかりと狭箱（せきばこ）を用意の
捕繩（つかひなは）、表（おもて）へそつと窺ひ足（のぞみ）、阿波の十郎兵衛（おのえ）遁さぬと夕日も西へ入身の備（そなへ）
へ、立ちよこ才なとほぐしのやら、互に裏取表（おもて）、助右衛門があぶく

と心を配る氣を配るが弓をてうそ眞の當述行曲者遣さじどたちるぐ
足を踏しめく跡をしたふて「行道」、大川筋の濱傳ひかけくる浪人追
くるか弓、人あそ所に立どより詞、こちの人女房ヤウも、まんまと首尾ようで
かしたく、五百兩といふ仕事思ひの外心安ふ手に入て有難いと財布
取出し戴く後へ、いつの間にやら庄九郎ヤウ様子ヤウ聞たげんよいめよふ
さつきにゑらいめよあひしたあ、銜共カタを引くより代官所へ引て行覺悟
えおれといへせも立す引抜て大げさ切ぞつさり響ヒヤクる六つの、がね懷へ
夫婦連行方ハラフらず成にけり

第五

南無阿彌陀アミタ、柳當寺ヨウドウジの御本尊目剥の如來と申奉る、人皇廿六代武
烈天皇惡逆無道の王様にて渡らせ給ふ其時に此如來出現ましくて
惄怒給ひ兩眼がんを剥せ給へ、武烈天皇眼めをまへし給ひじより目剥如來

と号し奉るがゝる尊き傍佛あれば此接州寺町尊正寺に安置仕給ふ。一度拜する輩ハ悪事災難をまのがれ時花病ひ取つく事あたへずまた盜賊が這入んとすれば睨み殺し給ふ靈験あらたある尊像でござる。此度つい手には開帳へござれ共又はかい帳ハ稀あるに事でござる信を取て拜を有れませぶ此刀ハ三條小鍛治が打たる名劍義經公よりの寄附でござる得と拜あされい追付開帳に間もあければ賽錢を上ては縁を結ばれませふと縁起坊主の口車老若男女押合へし合寄隨も取々聞傳へ、か百度参りの數取や投る散錢ばらくく早閉帳の鉢の音戸帳も下七ツ過思ひくに願籠て皆ちりく立歸る二人の弟子ハはつと顔ナシ才覺坊此間ハ無上やたらに夥しい參詣此如來の奇瑞にハ根性の悪い者の眼を剥いて睨ましやるの、お請が有と座頭の眼が明た膝行が立たぬと世上て専の取沙汰そこで我等か出たちめの縁起何と昧やつ

たで有ふかあいかみも貴僧のいやる通、今迄何の役に立たぬ如來じや
と思ふて居たり、こちどらが根性の悪いの、是迄貧乏し此寺、和尚も俄に
福僧にあられて今夜彼お梵妻が見へる筈、此様に賽錢の上る時にしつ
だめて買梵妻で樂しまふじや有まいか、ヨリヤよからふとそゝり立、天窓擲
いて悦ぶ所へ、奥より和尚立て出で、才覺坊鈍才坊、最日も暮かるに何
をのらくら賽錢集めて仕廻ぬかと呵られてとつばかり、賽錢箱を打明
て傳手につあぐ珠數の實の、數八貫蓮葉に浮む小玉や包銀、一つに集
めて、さきのふうの銀納が多、モウ日も暮れバ彼者が來で有ふ鈍才の爰掃
出し火を燈せ、才覺坊此錢銀納戸の内へ運んでれたと打つれてころ
入にける既に其日も黃昏や身の置所あき花のベつたりとした厚化粧
人喰た様あ口紅粉でびらりしやらりの冬爪顔、付添來る淨慶へ門内窺
ひふとあへば、和尚の待受出向ふ、和尚様約束の彼梵州只今同道致

しましたそれへ近頃は苦勞千万先づ是への挨拶に伴ひ座敷に押直り
扱て昨日何角お咄しやた通は是から隨分可愛がつてくださりませへ成
程く衣の振合も他生の縁可^か愛^{あい}がらいで何としませう貴僧何角とい
がいは世話でござる、^{ヨリヤ}鈍才^{ダラカツ}盃^{マグ}を持て來よと和尙の目遣ひ取着銚子
盃^{マグ}持出れば是へく迄ていねい然らば先仲人役差圖致さふ、^{ヨリ}正貞様
何ば天憲^{アメニキ}丸ふてもお定り^{サマ}呑^スで差んせ、そんあらか慮外^{リヨウガイ}と盃を
取上れりお酌仕らふと三獻合^{スル}せつぎかくれりずつと呑干^{のみ}此盃^{マグ}はぞう
せふへ^{ハチ}あれた事葬禮込の^{ミヅケ}梵妻^{ボンセイ}其盃^{マグ}は和尙様^{ハシモト}へ^{ハシモト}是へ近頃お慮
もじ是から万事は世話かち、免角^{カク}の念もじにあされてと、お極りある口
上に和尙はやく打笑ひ、盃取上押戴^{マタタキ}き世話^{ハシモト}の互に此方からも頼ます
と是も三獻受持て、一ツ鳴尾の沖過て早住の江に着^スけりと祝義の小
謠^{タチ}是で固め^{カタ}相濟だ、仲人役の我等^{ハシモト}の茶碗^{シラフ}と手酌^{シラフ}より引受がふくく

肴の酢鯛か祝義を祝ふて酢鯛とへり出來たと鉢をかゝへて無息呑み、
目出たしく和尙様もふかう解合からへ云て置ねばあらぬ拙僧が
寺号梵字ハ尊正事、替名ハ正清と云程によふ覺へて居たが能ぞや。そん
あらね前のかへ名ハ正清様、いかにも正の字ハ正しく清の清僧といふ
證據、そぞしの名ハ正貞と申ます、正ハ正しい貞ハ貞女の貞の字でご
座んす、おまへの名ハ正清様、そもそもじハ正貞、思ひ合た名じやのふと坊
主天窓をかち合せ、抱付たる有様ハ蔓つるをからみて出來もよき、西瓜を見
るが如くニ、先づ渋氣に入て大悦致す、仲人ハ宵の程最早お暇申ませ
ふと淨慶ハ庭に下、ひよろりと立歸る。余程夜が更たあすへ遠か
ら起ねばあらぬ、門を玄めて火の用心、正貞おじやと手を引て、和尙ハ一
間へ入しけり、跡に鉢才才覺坊、浦山しげにあがめやり、ひよんあ氣にあ
つたよがふけたれべぬけそもそもあらぬ才覺坊、かれも體からだがしやきばつ

て來た、虫養ひに抱れて寝よふか、抱れてハ寝るけれど、こあたも愚僧
も同じ身の上、べこんあ事しつたらば、去年おとした前髪が、どちらに有
てもよい物を、任せぬが世のあらひ、サア、寝よふと帶解ひろげ抱付寝
るより早き高鄭、早更渡る、夜嵐に水も寝入し、丑満頃、皆一様の忍び頭巾。
先に進ハ闇の黒八ばつたり道七跡、又扣へし大男、大だら腰に名も高き
阿波十郎兵衛、夜盜の一族、叫き點頭、黒八道七腰のだん平引抜て手練の
早業數垣、一重音もあんあく切破、二人のそつと、忍び入内を窺ふ門の戸
を開けバ十郎兵衛しづくと指圖に隨ひ兩人の指足拔足納戸の内へ
忍び入、銀箱かますを引拘へ出るに和尚の眼を見し、ヤレ盜人よといふ聲
に、二人の弟子ハ飛上り、わつと裸で胴ぶるひ、黒八道七睨付、ヤアあたやか
ましい、おどほね立るヒ僧等が爲に成ぬぞ押たまつてけつかれど、つか
ふと聲に和尚もわあく、爰ぞ大事と胴をすヘ、命しらずの盜人めら。

此寺へ盜に這入といふ。僧等が大きあ不覺爰を何所じやと思ふ。爰
ハ寺町尊正寺じやぞよ。忝も木尊ハ奇瑞の有眼剝の如來。諸人群集をあ
すを乞らぬか。僧等が様ある盜人共が這入錢銀を盜で往ふとするを。如
來様がお目玉を剝しやると忽其體がひり／＼ぐにや／＼と
碎て死るぞよ。そんあめに合ぬ中に盜だ物を置て、託言を乞て早ふいよ
ふろふ、ヤイく、やかましいわい、ぬかした面いのふ、わいらが手に入れた
物を返すといふ。如來が撥鬚奴又成て泥龜屋をする時節に歸して
こまそふ。こいつがく、生如來様を勿躰。あい事いふたぞよ。よい／＼
兩僧、此上り如來様のお力を借ねばあらぬ。わいらも俱に祈れく。いか
にも合點と裸身又手巾鉢巻すたゞ坊和尚と俱み珠數さらく。と押
もんで抑我朝に尊き佛の多けれ共中にも、こちの眼剝様一に意路の惡
い奴、二に睨三に三もあめに合せ、四も死る程あ苦しみかけ、五も五体を

しやきばらじ、六ツ夢中にあるあらば、七泣てもわめいても、八役に立ぬ事、九ツ爰^{アキ}な大盜人を、十で頓死をさせてたゞ、南無眼剝^{ナムメイゼツ}の如來様と責
かけく、祈りけり、時に不思議あ雲かこらす、奇瑞^{カミ}も更に有^ハこそ、和尚
も弟子も手持あく、うつとりとして居たりける、十郎兵衛高笑ひ^{ハラハラテギ}、利
うまいやつじや、ヨリヤ皆よふ聞、手下の者に云付て、利もせぬ如來を願^{ハシメ}リ
と云て此寺へ錢銀を上さずのれ、皆おれ仕業^{ハセキ}根を尋ればおれが物で、お
れが取に來たが誤りか^{ハシマ}扱へこちの如來を時花すやうにして、錢銀を
上させ其銀を取に來るのじや、ヨリヤ亞^{アキ}じや、レそんあらぼうしやに少斗と、
取付腕首引つかみ^{ハサミ}、報謝^{ハセキ}にハ丸裸^{ハコハダ}と和尙の着物^{ハタケ}取^{ハシメ}、是^ハ胴欲^{ハタモト}お赦
しと二人の弟子が取付を引つまんで打付れば、黒八道七俱^{ハチカウ}に踏付く、
ともふ能い^{ハシメ}く、赦してとませしたが寶物の此刀心當の代物^{ハサミ}と引抜て
とつくと改め^{ハシメ}、何の役に立ぬ生くら物、何じやきらくとした此打敷、

是も一矢よに盜てやる、又賽錢さいせんがたまつたら取とみ來る、必人かならずに盜ぬすまれな
よう大盜人めいと十郎兵衛、手下ひしや諸色取持とりせ、悠ゆ々ゆとこそ立かへる、斯この
見るより正貞まささだの庭の隅すみ走出はなれ裸はだか和尚こうそうに縛付しばりさつきにから剛ごうさに味增みを
部ぶやへ隠れてあたが、此お姿すがたの何事なにことぞ、今夜漸よほど此寺へ入佛いぶつして寵愛くわい可愛こわい
と肌はだべれた、其ぬくもりを冷さうしたたあの盜人の胴欲どうよくや思おもへんへん和尚こうそう
様目剥むけの如來で銀儲ぎんじゆ銀澤山ぎんざわさんあ、此寺へ來ると其儘盜人にあふと云いの
あたすかん、よくくくあすびあ生れ性、夫お悲しいくわいと身欲みよくを思おもひ託たく
泣正味なきまじみの涙交かわあしかわ悲かなしいかなしの道理ぢのうく、是に付ても聞きへぬき、日頃ひご飼くて置おき
う如來殿、盜人と一味いつめいして、よふきついめに合あつしたのふ、此評判ひやうばが廻まわつた
ら、あすから參さんりる一人ひとりもあしこりやまあまああふせふお覺坊おもはりぼう、成程せいじゆう悔くや悔くや悔くや尤おも
いつれ泣なきても歸からぬ事こと明日あさひから鼻はなの下したを養やふ思案おもんが肝心かんじんが肝心かんじん才才能何なんと思
やるぞさアビドおれもそれが心こころがこころりる、そふるたらよからふふと思案おもんどり

そりさまへに四人の胸をいためける、中に毛和尙涙をとじめよ、よい
分別が出たぞく、二人共に聞いてくれかゝるさいあんにあふ不仕合、あ
すから參りも有まいし、あいとひあがる四人が鼻の下の養ひ様やしな、幸普
譜じんの時の地車にア如來を乘のせ、町まちへ勸化くわんかに出る思案おもんなどふじやシヤいか
櫻寺に置て役に立ぬア如來、むごいめに合せ過怠ごだいよからんと二人の
弟子勝手かつたへ立て引出し、住寺も俱ともに地車へ乗る如來に恨言うらぎいかにしら
ぬが佛じや迎むか、あんまりむごい胴慾どうよくじや、毎朝まいちょうこちらが喰くぬ先ま初穗はつほを
上るハ何の爲ため、こんあめ合あわせぬ様ようと大事おほしだかひもあい、去さるむご
いのら如來思ひ廻せば、廻す程腹はらが立て身からが燃る、今夜始はじて枕まくらをかへせ
し、正貞の手前まへさへ、面目おもてをあいわいのと又取、亂すしやくり泣な、お道理
と泣なたさを泣なぬ鈍才才覺坊どんさいさいじやうぼうとやかふいふ内に夜明鳥よめのとりのかしまし
や、や出でよみとすくめられすまぬ和尙もはだか身に衣手きてに二人の

弟子、跡に正貞ふくろ持。才覺鈍才聲はり上横寺町尊正寺眼剝如來直の
勸化盜人に合て尊正寺、和尙はつちと口もに衣の奉加口奉加、打連てこそ

第六

とんくくとんと世上の色の湊へ京の女郎に江戸のいきはり大坂
の揚屋で長崎衣裝着せて、一ふう三四五六ふ七八丸軒町、師走の果も色
里へ別世界ある賑ひよ胸の煤掃衣裝着せ、紋日の日和吉田屋の庭の餅
搗手鞠つく春より先に春めけり、せき候だいくく是れせへしるい。
今やうくと搗かける所へもふ催促か、五六間行廻つておじやあんま
り早いと顔見合せヤア太四郎様、こりや珍らしい、何の間にトの字へか這
入ハテ喜八田舎者貴様へかで昇かれタナヒ大壺持貴様やあいらひ、旦那衆を
せぶつて喰ふせきいと同家身ぶん、こいつへゑいお譯せん、お上へ申上

さんせこや聞て居と伊左衛門、太四郎喜八隙がぬると思ふたが、龍宮の踊の席へ、此浦島を待せて置て乙姫へとこよゐる染之丞とふじや、太夫さんり玄やくでつむりがふらつく迎わたしをさきへ、おたりそんなれば此子を此子、つきましていたがゑいわいの、手鞠斗ついてぬずと、最一走呼ませておじや、コレこれいあふづ、聾^{アキ}夫でも手鞠がわしや面白い、とんくく走り行^{アタマ}又夕霧様もきついきしましやう、旦那江戸へか出あされ、半年もお通ひあかつたに、此頃久しぶりのお歸り、磁石の様にひつ付てござりそふあ所、扱い藪原でのお樂しみを、少しひぞりの筋と見へる。そふじやあいぞへ住吉やの阿波のお客、身請の噂でふとつた積、とふぞ伊州様の方へ、ちやつと身受さしましたいと、こちの旦那様が氣をせいて、京の藤屋の手代衆に逢ふて、金のおりのりしてくると、それでおとゝめ京のぼり、何じや、喜左衛門アシザエモンのふれに隠して本家へいたか、氣

轉へ利たが親共の悪いくせで女郎が嫌ひ、じくぢつて戻らにやよいが、
旦那、そんあ先折おつしやるあ、大事の祝義日、神様へ早ふお鏡備へま
し、お二人中もまん丸に重り合ふてござる様に、喜八下手じや、是から
太四郎が一臼參らふ、臼取へかしの役、お澤せん、お徳せん、二人を仮の本
妻妾てかけ、旦那はやして貰ひませしよ、さりやく、こちのかしらやかでかや色めが、
紅の襷たすきをゑんとろもんとろかけてゑんとろと磨きやりましたをつこ
あら今じや、旦那ハ金持、太夫ハ積持、我等ハ奉頭持、喜八ハ荷持、中居ハ懷
妊わらわか、お澤が尻餅しりもちてんがうさんすあ、お徳がやきもち、送りの長持ながます、もち込
取込吉慶吉田や、さらば是からせんざいらく、まんざいらくと香鼓打連
奥へ騒行、公界の中の樂しみ、勧と色と二ツ葉の音に聞へし全盛ぜんせいと、名
に夕霧の立姿、雲の黛筆まゆ筆にさへ誰書あさん越後町しづけ媚まつわらくかい取の、
跡に身躰しんづやれ編笠あみがさ、紙子のひうち朝夕の煙も其日の貰ひ喰まつぱお情じよう預り

ませふ太夫様や太夫様と付て廓の揚や町、鎮人が見付て走付。櫻も此乞食殿へ伊勢参りの道か何ぞの様に太夫様の傍へきたあいありで、しつかい花畠の鳥かきし見るりの悪いのいて貰をとつかふとに、夕霧つくづく打守り。のふはしたあふしからぬがよい、心有げむ物貰ひ紙子姿の粹の果昔のせんあお方やらかいとしばやと美しい、詞に取付さすが名にしあふ太夫様、お見立の通其以前に、分相應の花もやつて參りましたかうした風脉のものを結講あひ挨拶。あんまり有難ふて、物貰ひます所じやあい、何とお禮のヤ様も此身分さもしい物じやが私の志をふぞお受下さりませと、貰ひだめの錢一文破れ、扇に差出せば、さたあ太夫様ありや氣ちがいじや、相手にあらずとサテお出といへど諸へず錢取上縫子縮緬が懸へせず、身には襟襷をかけふ共、心に錦が着たいといひ昔の隣あ女郎衆の詞、御念もじのお禮添ふ存じます。そんあらお受あされて

下さりますか、有難い、其お情にあまへて、や出すも近頃、お恥かしい事あがら、太夫様、私へか前に惚ました、もふ／＼惚たといふ段で、いい忘れせぬ跡の月の廿日の朝、時分、柄物參りも少なし、氣の大きい色町へ行たら、手の中ちも多かるかと、九軒の方へ來たが、因果、夕霧様の道中、ふつと眼にかゝつてから、美しい、こんある物を抱て寝る人も有よと思ふと、錢貰ふ事も喰事もどんと忘れて、毎日／＼外へ行すに、此廓の中斗、お前の姿見る度に、あんまりめつそふあ事じやと思ふて見てもどうも／＼忘られず、つがすぼうの上に懲煩ひで、糸より細く瘦れたと小哥の通り、此通あら、とふで死るでござりましよ、不便あやつじやと思し召、どうぞ傍報謝にたつた一夜を抱れて寝てくださりませ、お慈悲じや、お情／＼と、手をする涙あみ笠の辻に、ひれ伏泣めたる、さすが名取の夕霧

藝文嬉しい添い、聞届ましたぞへスリヤ叶へて下さりますか、サインお志と女郎のいきぢ、立あからでハ咄しも成まい。サアまあこちへと吉田屋の内へ手を引連て入、すきが悔り興さめ顔詞コレ大夫様、其乞食をお前ハ色にする氣かいあ、イヤ色じやあい、高ふても低ふても、お客様に買れるハ勤の習ひ、此お方のおあし一ヶ世に有人の千萬兩、それで夕霧が買れたハいの詞、あの錢一文で賣のかへ、お前それでも揚のお客が有ぞへ、うかしかりハ女郎の儘、したが其姿でハ宿の思ハく、コレ染の丞、幸伊州さんの替衣裝召かへさせてつれましておじや、わしや奥へいて居るぞや、そと禿が長持の夜具に添たる、大盡じんに小袖着かへさすがのやり人詞鞠くまれいかよはききの女郎さんじやて、物好もよいかげん、太夫様を乞食に借とれ、犬に伽羅喰す様あせんさく揚の、お客へしれぬ先に、早ふ戻して貰ひましょぞやコレ夕霧さんの禿衆染之丞くわ、錢一文の太夫さん呼ましややあとわ

めいてびんゑやん出てゆく、とかくする間に取繕ふ、破れ紙子へときの
間にたちまちかかる粹摸様、髪撫付つ撫さずられ、物貰ひの夢見た心地。
有難過て身ハがちく、太四郎喜八飛で出アキタマツシテ、やつちやお出アキタマツシテ、初對面の判官
様、北か南か粹すいと見た眼ハ達ハぬとそやし立られひや汗アガラ、南共アツコく
所の長町、ヤ南堺筋九丁目メニ、それがああたのほ本家かいチく本卦當卦
うらやさんの筋むかいハハハ、そりやお下屋敷で有、あたまからかあぶり
ハ、ちつとてうでござりましよ、其お長とハ我等相住シタリ、ああたの
お妾エカケを、ふ長様トヤマサすか、ザ、それハあれによふあついて、戻ると尾テをふ
つて手ハくれる、ふとんの替ハシバりに抱ハグて寝ると温ムダクふてよい物ジヤガ、時々
足ハねぶるにハこまるてや、いやらしいお契ハガキりじやあ、そふした色様
有ハから、此廓スルハへお出かけハシマツシテ、しやれ木の金毘羅大盡様ビラヒシタマ、先ハシマツシテ通りと、そ
り立、足元にころりヨリヤ何ハナシじやうそ穢キタマい米袋乞食ヒヨウが爰ハシマツシテふ様ハシマツシテあいが、

捨て仕まへと門の口開、勿駄いづなあい大事の物、一握りを大駄でハくれぬぞ
いきついたいと見せる悪じやれ、是もちよほくちよんがれか
い。貴様をこちの町から出たか、よつ程下地があるひいのと、素性顯すうじゆけいへ
すあるきぶり、され共、此人夜よれ共晝見よみへすをふやらしゆんだ謠うわじ
やと思へとしらぬ奉頭持、旦那上じやと付て行、そぶり見付た伊左衛門
一人小腹おなかの立つ居つ、生傾城けいせいの四よッ足め乞食ごしにさへ惚ほるからハ撰さん嫌いやひあ
しの助兵衛女郎めのすけだまされたが悔やしい、あれあら身請みねの仕人てしさへ有はばと
つこへでをうせるで有は引ひすり出して踏ふかハ、それもあんまりやぼじや
とふぞ粹ことわりらしい頬打こめうちの仕様しじようが、有そふあ物ものじやがと憤氣はんきの仕様しじように手を
組組で、工夫むかの半な澤さわが走はて、やく、新住の阿波のお侍様し、お前様まに逢まふと
て、吃く相あかへて見みへたひいあ、おあじか逢ましとむあい、それでちよつと
もらしますといひ捨出すてれど、何の侍しといひ事ことのみぢんもあい、逢まふてと

まことに強い事、云て見たが侍客、慥に意路悪の郡兵衛め退放の身の伊左衛門、逢れぬく、隠れふ所も、何の其、夕霧が色の根を持郡兵衛いつの事せりふせうか、そふして、をふせうあ太夫めが性根も見たし、破るいやすし、隠れて見んと、短ひ心を長持の底に納めて忍び居る、上の女が詫るも聞ず、郡兵衛が高呼へり、伊左衛門の大ずりめ、三ヶの津お構ひの身を持って、大坂の廓通ひ、夕霧が虫に成て立つきだて、志やらくさい、爰へ引出せ仕様が有ぞの様におつまやつても、伊左衛門様へ爰に、ハヤサ隠すとうぬらが爲にあらぬ、よいく、家搜し玄て國元へ引ずつて行、案内せいとそこら傍睨廻して入跡へ、亭主吉田屋喜左衛門船上りの合羽がけ、太四郎喜八來て居か、喜左様待て居るく、京の首尾へをふじや、かね請取てお歸りか、今も今阿波の客がひがおこして、伊左衛門様に直よ達ふと、一へん三がい迄家さがしすれど、めんよふあ伊左様が、いつの間

にせこへやらどんと姿が見へませぬと早ふ金の顔が見たいときをひ
かゝつて尋ねば^問伊左衛門様が見へぬか、そりやこそあ、あんまみだ
く、こいまくしい何じやぞいの、まあ伊左様に逢したい、お澤殿最一
度尋て、ヨリヤくもふ尋るよ及ばぬ、伊左様へ死志やつた、違ひあし正真の
事じや、藤屋の本家へ尋ていて様子を聞バ、伊左衛門様へ此夏江戸の店
で死しやつた、志かも大名の名を街たばくで成敗に合志やつたと、早速
店からいふて来て、遠に^を體見の葬禮^{さうれい}げふ石塔を立る日じやと、坊様が經
やら百万邊やら始めてあふた隠居が、わしつかまへて泣つ志やる、
戒名も書^かて貰ふてきた好色院粹客美男信士たつた今迄姿の見へたれ
夕霧様に心が残て逢にござつた幽靈に極つた悲しや跡の月からの揚^{あげ}
代雜用香奠にあつたれいの、あんまみだく、テ志まふた筐^{かた}こそ今れ仇^{あだ}
あれ此の紙花此正月奉頭持のかた三日買てくれるお客は有まい肩^{かた}

志れたと駕籠かきの杖に離れし涙く伊左衛門め爰にゐるかうせいと
引立出郡兵衛が戀の妨するあまじらけた此しやつ頬と髪引上^{アマツシテ}と
りや違ふた、めんよふあとつき放せばテヤ伊左衛門様へ死しやつた
物何のわたしが所にござらふ、イキタ霧を揚詰の客ハ慥ニ伊左衛門と聞
て來たれい、申いかにも伊左衛門とすれ私^{サマ}同じ名ハ何ばも有中、夕
霧を買ふたも私^{サマ}前様と近付であけれバ、意趣^{ヨリ}請る覺へもあし、何でか
やうに打擲^{テキチャキ}あされます。シヤ人達へよ、二腰もさいたる人が理不盡^{ジン}
客の座敷へふん込さへ有に、あせ此様にぶたつしやつた、お侍様、とりや
は鹿相^{アシカ}でござります。あチ、まあそ相のやうな物さ、傍鹿相あればまつか
うと、足首取てつき倒せば、うぬ慮外やつ、何ひろぐ。是も鹿相でござり
ます。推參^{アマツシテ}と抜かゝるを、御堪忍^{アシタシ}と喜左衛門とめる顔してつき飛せ
べ、車頭が詫言^{カビ}もあらず簡拜^{カクメイ}ますといふていつめ、御尤でいふみと

かす尤ごかしに身のひよろく。ふぬけにあつて、^モ亭主、あいつぶち放すやつあれ共、そち達が詫るが不便さ、助て歸る。有難ふござります併あがら思へへあいつ、もふよござります。喧嘩喧嘩へさらりと住吉屋で酒にせう、お身の痛いたみに瓢箪町で、瓢箪酒もよござん志チアンタボマ・キャンチキ、^モ瓢箪じやくとれ留主に成た留主居の腰、押立て「こそ」出でゆく胸の睛間を夕霧かき、禿かぶみ鉤子つるし盃持せ、手の悪いきこへはずしてぞ、末長すなはかための盃一つお上り遊ばせと、客あしらひの嬉しさじゆつあさ、心の何になどふ紙き、伽羅カラのかほりよむせ返る、喀氣ケキの煙けいあさま山、藤屋とうやへそつと長持の、二人が有様見る共亥らず、此様シヤウ思ひがけもあり、有難い事ガハいませぬ、^モあほんぐにお前様モテヤウを抱てねるのでござりますか、サレバサすお前の望聞入た其代に、又わたしが願ひが有モセ、何ナニと承りましよ。サア願ひといふモセわたしを抱て寝ずに抱て寝て下さんせ、^モこふいへモあぶる

共思ふて、有ふが神さんかけてそふじやあい、藤屋の伊左衛門様といづ
い玄た中じやあいわいあ誓紙より堅い互の心任せぬハ勤の身此間外
へ身受の約束伊州様も部屋住の急に才覺出來ぬ中、若外へ定まつたら、
此夕霧へ生てハ居ぬ、それ程心底立る身でお前に抱れて寝よふといふ
たれ貧しいお方の志を立るも一つ、眞實の、お前様と寝たといひ、袖乞
に肌はだふれた女郎と廊くらわでばつと唇くちびるにあり、客の落るが、わしや樂うきしみ身請
の沙汰さたをやむ道理、こちから頼んでぞふぞして、惚ほれて貰もらひたい所を、よふ
惚ほれて下さんした。此上のほ無心にハ盡斗すくで了簡りょうげんして、逢ますと逢またぶんに
して、面向計の色に成て下さんせ。夕霧が命一ツ助たするハお前の心、一生
恩に着きませふと乞食ねぎじきを拜まつむ兩の手に落おちて、流の涙ある、つくづく聞きて顔
ふり上あが、太夫殿必其詞わざを違たがへず伊左衛門様の事を、一生見捨みすてて下さるあ
や、そふいわしやんすりや、お前の心も、いかにを誰も聞きて居ゐらせぬか

と見廻す後の長持は、伊左衛門様か、助右衛門か、はつと洟り蓋びつし
やうに、隠れさしやます事へ、伊左衛門様の事に付て、夕霧殿に
恨も有一通り、わしは今橋の絆屋の手代、親方の娘はお辻様へ、藤屋へ嫁
入さつしやる筈、親は同士のいひ約束、結納の金子五百兩を、盜賊に街ら
れたる此助右衛門が一生の誤り、藤屋への言譯に、わしがでに勘當受て
其あげくに大病やみ、少々の道具賣喰、とうく、長町の裏屋住居、途中
で伊左衛門様のお自よかゝり、江戸のしだらのお岫し、京の本家へ、立
寄事もあらぬと哀あお姿いひて親方の聟様、おれが爲にも旦那殿、さく
と内へお供して、術あい世帯をしらしたら、氣兼あさるゝ毛氣の毒と隨
分貧乏を隠して居れば、此助右衛門、おれが大坂へ來たる夕霧に逢たさ
あれど、此寒いありで、廓へいけぬ衣装の才覺頼むと有、お辻様の事を
あれ程に思ひしやるあらと、小腹へ立せ、しとのあいがよい衆じやせ、

古手屋を詮議して損料^{そんりょう}がりも一夜^よおかと思へば幾夜^{いくよ}さもなく^な適内^{ふさわしい}
でござると、本見る迎小買^{むかひ}の油に燈心^{とうしん}を十筋も入て夜明^{よあけ}し晝^ひに成^なと氣が
重^{おも}い、食が味^あいといひつしやるも無理^{むり}でない、謠うたひの寄米^{こらめ}を喰^く
るがら、高砂屋の羊羹^{ようかん}をとつてこいの、其間にりとつけをあい、金四五十
兩^{りょう}借りてくれいのと、つまんだ様にいひつしやる、廓^{はう}の贋^{せん}に入かね、お辻様^{おつじやう}
の仇にある夕霧殿^{ゆきりん}、といへ誠の心底^{こころ}なら、本妻^{ほんさい}妾^{わらわ}も有あらひ欲^{のぞ}でする
のか眞實^{じんじつ}か、とお様^{おしゃう}の性根^{じやうこん}を、ためして見る乞食^{ごじき}の色事、紙子^{しじ}姿^{すがた}に情をか
ける、驚入^{おどろいた}た女郎^{めいろう}のいきぢ、あづましやつたも無理^{むり}じやあい、いふへくだ
じやが、最前のわしが姿の通り、紙子着^きた伊左衛門様^{いざえもん}と、隨分添^{そなへ}とげ、其上^{うへ}
でお辻様の身の上も、見捨ぬ様に頼^{みます}、おぼこ娘の一筋に、ああたを
てがれて、秋の頃^{ころ}ぶらくと、今に煩^{わざわざ}ふてござるげあ、それ程に思ひ詰^{つめ}
さつしやつた、心根^{こころ}がいとしき袖乞^{そでご}の中^{なか}で、茶屋遣^{ちや}ひの仕送^{しおくり}するも、や

つぱりお辻様へする奉公かいの廻らぬせんの語り、嘵を伏見の泥町へ
身賣三つに成坊主めが乳を離てぐしくと泣寝入に寝おる顔見れば
浮世の義理と諦てもほろく涙がこぼれますと歎けべ道理と夕霧も
お辻様に義理立て思ひ切ふと思ふ程とふも切れぬこれらへてと同じ思
ひをかきくそく心のたげハ塵紙とのべの幾重を染みけり二人が誠肝
にしみ衣装櫃の蓋押明大盡姿引かへて以前の紙子身よまとひすく
出る伊左衛門助右衛門夕霧おれ故段との心遣ひ何にもいへぬ諸事此
ありで推量しやといふに二人の顔見合せ覺悟といひあがら室町藤
屋の旦那殿の是があれの果かいの此お姿を見てハイ一倍思ひ得切ぬ
といふて五百両といふ金があければ外へ身請の極るお身太夫が身
受け身共がすると障子ぐわらりと田舎大臣はつと驚立のけべをつち
へも又がしきせぬ身受の金子五百両則亭主喜左衛門親方と相對濟だ

れべ夕霧が身へ身共が儘、身受さへ志たれば、武士の云分へ立乞食に身
の穢けた傾城、侍の妻にあらぬ廓はざわを出た其跡あとへ乞食めに報酬ほうしゅうにくれる
勝手次第に連て行と、財布を其儘投出せば、そんあら此お金を下され、身
受して添せど有ござたあれば此様ようあ、か慈悲ひじ深いと顔見て惄びづくりきてあ
たれ日外ひつぞやの浪人よつなり衙めじやあいかまさいかにも其衙、衙あた金かねの藤屋とうやから息
女めのへの結納あわみの印、其時藤屋へ返させて、か辻殿と伊左衛門の縁切る、其
離縁りえんをさせまい爲ため態衙たいあた五百兩、則夕霧が身受金今伊左衛門へ返辨へんべん
れべ衙あのさん用濟すまふがのさ夫めもやつぱりお情じ、よふ衙あて下さりまし
た有難がんい盜人とうじん様さまへ、お禮ごれいくに伊左衛門見れば見えりのま阿波あわの十郎
兵衛殿ひょうえでん、阿波あわの客に近付ちかづく有ござい、此一腰いっこうの主人櫻井主膳殿しゆげいしゆぜんでんの魂たまし、手
打うちよあされた伊左衛門が爰に居よふ様さまがあり、殿のお姫様ひめさまの爲ため、大名
の仮名かなして科人に成た譯わけ心こころで譽ほめても譽ほめられぬが世の捷つばさそとを察さとし

て世話するゝ主人の心に成かれつての恩返し、金銀の貢^{おとぎ}ハ盜賊の一德。此五右衛門の銀十郎が受取た死で仕廻ふた伊左衛門、科の帳面さらりと消る、吉田屋の幽靈客、夕霧太夫も世間晴て、幽靈殿と未來かけて樂しみめさと辟^よあ捌^{はき}も主人のかなり割符を阿波の銀十郎ハ仁義正しき盜人ニ、次の間を喜左衛門氣の毒そふにおづく出、最前から何もかも残らず聞いて居ましたが、去とい思ひがけもあり、お前様が彼、噂のお盜人様でござりますか、お名を聞いて肝玉がひっくり返り、胴ふるひが出ました。が、人にれ添て見いじや段々聞べますが大きいほ商賣をあさるゝ程有て、譯の立た候様いや又、こちのお客も揃ひも揃ふた一人の幽靈一人の門立、一人の大それたお客様扱^はど、夕霧様の身の代、ああたの方から出した金を、親方へ渡しまして、ひよつと跡でぼくへ來や志よまいかる、何さく、五右衛門の銀十郎などへ明日召捕^とられいか体の責^めにあふ迎え。

同類もいふ男じやあい勿論お手前達よ難義かけてよい物か、主人の御用達する迄の大事の體、手足の付て有間へめつたに捕へられもせぬ男氣遣せずと金渡して、親方に落付せいさ。亭主けふの世話代有合の金子、取てふきやれと打露も、氣味悪そふに^アいやもふ是に及ませぬ、ああたに納^{アガハ}て置^{アハシ}えやつて、ハテよいへさ、をふで是からせきく來申夫の近頃お氣の毒是におこり遊ばして、必お出下さりますあ、中居衆ぬ亥う様のお歸りじや、夕霧様の廓^{アラカ}の名残、男共駕^{カヒ}いふて、といよくと手を叩く上の女下女太夫様^{アカメ}でたい、身受^ハ濟でも伊左様のかへつたお姿^アいとしや^{アシニ}あじみとおはらしい、いつも門出の見送り^アい、傍輩女郎の祝ひの發^{ハツ}句、けふの身受^ハ袖乞^{アシタガ}の、泊^{ハシマ}り定ぬ旅の空、歌や連歌の譯じやあい數島さんや金吾すにも跡で宜しう傳へて、ゑ^{アシテ}せめての餞別に、旅の用意の三尺手拭^{ハサマ}ひ、世帶^{セダ}あさるりや入物^{アヒモノ}と、たすき前垂^{ミヘタガ}お德^{ハシモ}が進上。

お前に貰た祐天様の守でお齋の出ぬ様にわしや太夫様にはおされて
是から便があく兎あくく出る門送り、いつの間にか郡兵衛、詮義
の盜賊、阿波の十郎兵衛のがさぬといへせも立す銀十郎、足くひ取て長
持へばつたりひつゑやり跡ゑら波打連でこそ「歸りけれ

道行思ひの富士

第七

かね付ひ娘心のはあれ時はひ板のゑの離様に戀といふ物ゑり初て殿
涉待夜の辻よ辻、お辻ハ二世と親くの、其約束も名斗に只思ひねの夢
にたに藤やを見たしあつかしの、いつくをあてに大坂のまちくありし
世の噂、若も此世におはせず、長き未來へ嫁入と思ひ詰ても振袖に涙
がたしく手枕に馳し家居を立出て、現の闇に迷ひ行、心の内ぞやるせあ
き、戀風や、其扇やのかる山と名に立登、夕霧がふりみふらずみ空情あひ
ぬ客衆れいそよさか裏紫の頬かむり深いと人も赦色ゆかり藤やの伊

左衛門忍ふとすれど古の花の風に落果し身の行末と定あき水の
うきくがい紋日くの凡もんじ禿立から生花の、水上初し昔々、かれい
男の只一人外の客衆へ空言のせいしの鳥きぬぐに泣すを熊野の傍
罰かや過し口舌の吉田やの二階ざしきに揚の寄夫をひそりの廻り氣
あ、方才傾城置てくれ見るもいやにまします、心のくさつたけちまんざ
い、よく客みでまんざい、けふ立歸るあしたる外の色と志かへける、誠
にめでたふ侍ける、そりや何いんす伊州さん、此夕霧をてあ様にまだ
傾城と思ふてか、去年の冬から丸一年、二年越に音信あくそれがこうじ
て瘡の種せん藥とねり藥と鍼の力て漸と、命繫でめた物を、あいそづか
しの何事と泣の女郎のお定り、客に逢ての空涙雨のごとくにふらす故、
大雨と是を名付たり、レまだむごい事斗瘡がうそあら是見てと、じつと
取手にさすが又、いあにあらぬ引舟の綱がきてんの一つ夜具、後の互

にいふ事も何のかれいが高ぞかし、かあじ懸路の迷ひ道、お辻へ見るよ
り走寄のふ伊左衛門様かいのと其儘ひざにうく露の、たまにあふても
それぞとへ得を夕霧か氣を兼て、つゝみ見立らぬ女中様いづくの誰と
よそめければ、覺へがあいとへ余りぞや、親と親とのいひ名付嫁といふ名
の有あがら袖も得誥ず此儘で尼あまに成とのお心か、夫も誰故川だけの、つ
れあき霧に隔られ、水に數書うかれ舟とがれ死とへどうよくとうき年
月の溜涙、早汲取し粹の徳お辻様といああたかへ、おいとしほい共お道
理共、こふした定る奥様のわたし故共思さぶが、ほんにせいもんおふたり
の巾をへだつる心へあい、それ斗へ辻さんのお氣の廻りのすね詞、そ
も逢かへる始はじめから、女房へあいと間み合あ、今さらのくよそのかれぬ
れいとしらしいが病亥いとやと、かんにんしてとかきくそをすがる袂の妻
と妻町とくるあの品かり色へかわらぬ一筋や、傾城の眞實誠がしら

せたい、眞實殿御に思ひれて、色里の一夜の勤ごんがして見たい。一夜の懺
有をせぬ、つらき戀こいしさかいさの、ぎりとぎりとにからまれて、ふじやも心べら
ばらの一村雨さくめを誘さそひくる嵐を人ひと忍しのぶふ身み、そこよ木かげを尋詫走と跡
へ夢心覺さめて、現空蟬さううなみの泣音斗なきねや「のくるらん夢の浮世に借駕籠けりかごの、仮寢
の夢や結ぶらん、ナシ權よ、且那殿ななでんへきつい躊躇じゆしゆどりや起ざふと駕籠の
たれを引上げ、トコトコとゆり起せりふつと目覺す伊左衛門走出れば引
とくめトクメ、ゆく、トコへお出あされますと、言にはつと心付ハタキ、正しうふ
辻と夕霧が憎氣にくのはむら、扱ハグハ夢で有たかとほつと溜息ためいきつく斗、二人の
駕籠かごハ合点行ハマリす、聞へた、夢かある見やしやりました物で有ふ、ナシ申極
の長町裏ながまち、毘沙門びしゃもんでござります、いかひ太義おおぎてござつた、シレ駕籠貰ゲイ
そんあらか静しづかにか出あされませい、又住吉參すみよりの節せつ、お乗あされて下
さりませ、ナシといと駕籠昇上のぼり、別れてこそひ歸りけるかゝる所ところへいつ

させき。とつばかふの武太六夫を見るより、斗笠傾けて行んとする。
伊左衛門おれを見て逃ふといひ横着者、われに合ふと思ふて今長町へ行
所、よい所で出くへした取かへた銀今受取ふサ渡せ、成程御尤去あがら
昨日も狀で下た通今と云てハ調ハぬ、どふぞ明日中よ、ヤたまれ、ヨヤ一昨
日といふた日限が切たぞよ、われも昔ハ藤屋の伊左衛門と云大身跡、今
すかんびんよあつても、別家の手代が貢でハくれますけれど、つをく
にハ云にくい、身分よちつと入用あ銀、男と見込で頼ますと、手をすつて
頼た故取かへた五十兩かゝり人の夕霧めど、われが中に遣ふた銀、半時
も待事あらぬ、サ今渡せ、サ今といふてハ、あいとねかすのか、こちよも急
に入用あ事か有、サ今戻せ待事あらぬ、ソリヤ余り無理といふ物、何がむりじ
やー、金借てまだ其上に無理と云はふが猶あらぬ、せひ戻さにや代官所
へ、といひ立行んとする所、とくゞ立聞銀重郎武太六が手をもぎ

放し突退れば、銀十郎殿、伊左衛門様、氣遣せずとだまつてござれど、落付詞にヤ銀十郎、いらざる所へ出て何で邪摩する、さつきにからの様子皆聞た、高が金すく、此お人様の事あれば、私が世話せねばあらぬお方其銀の出入わしにめんじて、けふにア待て貰ふ、コレも銀十郎といふて、誰えらぬ者もあい男、われも又とつば様の武太六といふてぐすり中間のすい方あれど余りあや抜のせぬせりふ、取かへた銀高詮義の仕様も有と、借たが誤今ハ云ぬ五十兩あら五十兩にして、此銀十郎が待て貰ハふかいシ換拶人か面白い、夫あら待てやらふが明日の晩切に急度濟さふといふ證文か書て貰ひたい、何玄や證文書、ハチそつちよ違ちがへぬ體たじあ證據うきよ、それがいやあら伊左衛門を代官所へ引ずつて行、サクとふ玄やと弱身よせみに付込一言ごん、成程なるほど、氣の濟事あら證文書ふ、ハチ夫で、コレイ伊左衛門様、私が胸むね有事氣遣ひハ無用と、やたての筆を追取て、さらく

と書認め、是で能かと指出せば、受取てとつくと見判（あ）ふてをわ
れが直筆必（じひんか）明日の晩じやぞよ（ア）ばか念つかずと早ふいね（ア）いぬるを
われよ習（ハシマ）ふかと、足も心もとつばかりぶ、鼻（ヒ）いからして立歸る伊左衛門
打しほれ、いつぞやこあたの情より、夕霧と一玄よに居ぞ、少あり共助
右衛門の世話を助けふと思ふ故に此し乍ら、仮初（ソウカ）あがら五十兩と云金
又もやこあたに苦勞をかけ、もしや難義に成まいかと涙ぐめば、（ア）お前
をふ世話するに、お主人の恩がへし、傍禮に及びませぬ、あすの晩迄受
合た詞ハ金鉄、お氣遣あされますあ（モウ）追付日も暮れば早ふお歸り、そん
あら今、の金の事（シタ）よござります、何もかも私任せ、おさらばくと銀
十郎、玉造りへと立歸る、跡見送りて伊左衛門（イサエモン）、頼母しい十郎兵衛殿と、
手を合せて後影、拜心の細道傳ひ、罪科防ぐ水晶の珠數も涙に笠の内（ナメ）
お弓殿伊左衛門様、是（ハ）思ひも寄ぬ（ア）此間の暫くお目にさればく。

達ぬが先とたつた今、銀十郎殿にもお目にかかり、又我故より差づめた金のさいかく、お弓殿の手前も氣の毒ヂ、あのおつまやる事ハいの、お世話を致さにやあらぬおまへ、夫ハ少ハシモしも厭ハシモりぬぞ、只氣がハシモりの夫の身の上ハシモうをふがあと目に溜ハシモる涙隠せば伊左衛門ミシお弓殿見ればそもそもじハシモりの夫の身の上ハシモぐみ顔の色もきつう悪いが心持でも悪いかと尋にお弓ハ打ハシモはれ包め共色外に顯ハシモれる、お恥申も耻しき夫の身の上ハシモ幸傍アハタリに人もあし私が病の元ヨレ是を見て下さりませと上着の、肩を脱ハシモければ下にハシモ淨土の五條袈裟ハシモかけしいかにと伊左衛門、猶も不審ハシモの晴やらず、かゝる所へ鈍才坊勸化廻りの戻りがけ、何事やらんと立開共知ぬお弓ハシモ顔ふり上ハシモ不審ハシモの傍尤ハシモいつぞや夫が勘當の侘ハシモ願ハシモへど叶ハシモぬ其場の志ハシモ兼て主人のお預り有し殿の重寶ハシモ紛失ハシモて行方ハシモれず、其刀の詮義ハシモを仕出し、夫を功ハシモより勘當の詫言せんと置つ、忠義一圖に夫十郎兵衛切取盜も刀の

詮義、主の爲とい云あがら、盜賊衝と呼れたる其科ハ遁難のがれがた今日や召捕のぞめるゝか明日や夫の身の上かと、日影ひかげを待ぬ憂思うきひコレ此袈裟きさハいつそやお寺にて、盜取たる打數うちすうと、聞てはつとの思へ共、是幸と我わが袈裟にかけ、お仕置しつしに、あふあらば少すくなり佛のお助おじょにて、せめて未來みらいの夫と俱に成佛願ふ夫が身の上、是に付ても思ひ出すハ三ツの時國又残せし娘のむすめお鶴、嘸二親を尋ふと思ふ程猶此身の罪命の内に今一目推量すくりよう有と泣涙、空かき曼春雨まんしゅんうの又降ふる如く、伊左衛門涙にむせびふ、段たんののお咄おど最前我身の難義の時、五十兩といふ金を明日中に戻す請合、今の様子を聞た上うり、とふもお世話よきも、ア、イ、夫が一旦お受合申た事ことハ返かへせぬきしつ、胸むねにせまつてあられもあいお咄おどし、日も暮ればお別れ申ませあいかふ暮くろ中早はやふお歸りおさらばさよならと暇乞ひまご、伊左衛門いざえもんハ乞こはくと長町ながまちさして歸りける、お弓ゆみも泣目なみめを押拭おしりふひ立歸らんとする所ところ、最前お様子ようしょを聞注きき

進来たる鉢才坊捕人に案内し欠來り。あの女遙するを云にお弓の悔
りし。何とあされます。何とへまがくしい。最前様子の體に聞たい
つそや寺へ盜にうせたの儕が夫、其時盜た打敷をけさにかけたが體を
證據。隠してを連れん。ナラうせふれと立寄鉢才心得ぬ弓が早足のや
ハラシ。され者と取付捕人右を左へ刎返され又取つくを向ふつき體
撓ふ弓が早業前へぞつさり投付けられべ、後捌の葛葛身をかい沈で眞倒一
度にかゝるをお弓が氣轉砂を擗て投かくれば、眼へはいつてあいたし
と狼狽廻くら紛れ長町泊の彈誇瞽女がとぼく行當りかつばと轉ペバ
志てやつたと折重て大勢が押ゆる隙間嬉しやと足早よこそ

第八

よしあしきを、何と浪花の町はつれ玉造に身を隠す阿波の十郎兵衛本名
隠し銀十郎と表ハ浪人内證。人の夫共白波の、夜のかせきの道あらぬ。

身の行末をせひもあき人の名を神と呼るゝ其神は、京の吉田の神帳に
入た神がや入ぬのかやほ共見へぬ悪ずいほう、とつばかふの武太六が、
のみ取眼のれん押上、銀十郎内にか用が有て逢に來た、といふ聲聞て
女房立出だ、武太六様かよふお出久しう逢ぬがまあぬ無事で、コレお内義、
逢ぬの無事あると地を打たせりふじやあい、あらず者の伊左衛門に借
た金爰の銀十郎が受合てけふ中に済す筈、夫で其金受取にきたのしや、
さりく逢して下されと聲も辰巳の上り口、尻しりまくりして高めぐらか、
其様に聲高にいはずと玄づかゝ物をいはしやんせ、こちの人の夜が更
たので今晝寝ひをねして居られます。何じや晝寝じや、夜が更たとハシ聞へた、
夜通してつりかいよいきげんじやあてこつる金が有あらか借た金
戻して行といふに女房がふしん顔アラ魚つりに行よ金か入かへ、そぞ
や何いふのじや、お前てこつる金が有あら戻していけといはしやん

すじやあいかいを、わしや又沙魚釣さやうにまらき海老えびでつるかと思へ
ば、金で釣てこといふ魚いそんあ魚いそんでござんすぞ、すいほうの喰くに似合
ぬきつひ太郎四郎じや、金を餌あaitoする魚いそんが有てたまる物ものかコレてこつる
といふいの、れこさの事ことじやわいのとあたもすいほうの女房めらわらちつ
とでんしよでも覺おぼへそふあ物ものじやがあ、今いまの世界せかいに青二引せいにひきぬ者ひとと、お染
久松語くまらぬ者のひと疫病えきびやうを受取うけとといの、こんあ事こといふ間まへあい、銀十郎ぎんじゅうろう
起おきてこんかいこりい事ことい何なんもあい、高たかが借錢うけぜ乞ねに來くわたのじや、起おきざおこ
しに行ゆどよとわめくわめくをあだめる女房めらわらもてあつかふあつかふで見みへにけるくわ
あたやかましうぬかすので、あつたら夢ゆめをさましおつたと、欠くずはじくら
立出だきだつる、銀十郎ぎんじゅうろうがぬほれ聲こゑ銀十郎ぎんじゅうろうわりやま夢所ゆめしょにや有あまいがあけふ
中に戻もどさふと約束あくせきの通り受取うけとに來くわたのじや、サア今渡まわせ受取うけといやとい
や此證文しじょうもんで直ただに代官所だいかんしょへお願ねがひすが、わうやてんとへ出だられぬ身分みぶん

じや有ふがなと、病づかずハ疫病の神と名の付奇特あり。やかましい
口導送ハけふの内大方工面も出來て有是から直々先へいて才覺して
くる程に太義あがら晩方^{はるか}といと聞いてハ遠つよふも得いはず。晩方迄
ありや待てやろ、其かへり暮六ツをどんと打と直に受取に來る程に、其
時又成てからあらぬあそ、ねだ切はつた所で三そつば打れた様に、が
つくりさすのじやあいかよ、今度ちがへば直に代官^{サムライ}呑こんでゐる、最
一度いたら體に工面の出来る金、われもいぬあら連だとかいと云つ、
出る袂をひかへ、其様に體にいふて何ぞ充の有事か又た遠へば氣の毒
あまあ二三日を云のべて、あらぬ二三日の事ハ勿置半時も待事あら
ぬ、やくこいとせり立る、武太六伴ひ十郎兵衛我家を出て行跡へ引違ふ
ていさせきと飛脚^{ひき}と見へて草鞋^{わらわら}かけ、内を覗いて、此狀届ますと投出
す一通女房取上うへ書に銀十郎殿へ急用と書た斗で下の名ハ内義隣

燈がござりますか私も人傳えとづかつて參りましたれど必先へ直よ
にと念入て申されましたが内方へくる狀かあと念を入れば成程く
下の名へあけれ共うへ書の手へ慥よとつちに見しりがござんす置て
いんで下さんせ夫も今へ留主あれば歸られ次第見せませうマはいつ
てたばこでも、いへくまだ外へ届る狀急用あればもふお暇済返事
あらば跡からそ言捨出る町飛脚もと來し道へ立歸る跡打あがめ女房
が心がゝりと封押切よむ度とよ悔りびくりアこりや是夫銀十郎殿を
始仲間の衆へも吟味がかゝり詮義嚴しく成たる故捕へられし者も有最
早遁れず立退とのじらせの狀ア夫十郎兵衛殿の身の上もけふ一日に
せまつたあんき、昨日長町裏で危い所を漸遁れ、レ嬉しやと思ふ間もあ
く今又此狀の文脉で、中々こふして居られぬ所我迎も女房の身殊
に術の同類あれバ罪科遁れぬ夫婦が命今更驚氣へあけれど一合取て

も侍の家に生れた十郎兵衛殿、盜賊衆と成果しも國次の刀詮義の爲重
い忠義又軽い命捨るハ覺悟と云ふが、肝心の其刀有家も知ぬ其内に、
若此事が顯られてハ是迄盡せし夫の忠義みをむだ事と成のみか死だ
跡迄盜賊に名を穢すのが口惜い、盜術も身欲にせぬ女夫が誠を天道も
憐り有て國次の刀の詮義濟迄の夫の命助てたべど心の内又神佛誓ひ重
き觀世音、ふだらくや岸うつ波ハ、みくまのうちのお山に、ひりく瀧つ
せ年ハやうくとをドの道をかけたる、笈摺ニ同行二人としるせし
ハ一人ハ大悲のかげ頼むふる里をはるくこゝに紀三井てら花の都
を近くあるらん順禮にほ報謝といふも謔しき國あまりテシしはらしい
順禮衆ドレく報謝しんせう、ぞ益にしらげの志アリ有難ござりますと、い
ふ物でしから爪はづれ可愛らしい娘の子、定めて連衆ハ親傍達、國ハ何
國迄尋られ、國ハ阿波の徳島でござりますよ、何じや徳島さつても夫

ハアあつかじいわじが生れも阿波の徳島をしてとゝ様やかゝ様と、一
所に順禮さんすのか、其とゝ様やかゝ様に逢なさ故、夫でわし一人
西國するのでござりますと、聞てごふやら氣にかゝる、お弓の猶も^{まことに}
寄、とゝ様やかゝ様よ逢たさに西國するとのをふした譯じや夫が聞
たい、ア其親達の名ハ何といふぞいのうをふした譯じや夫らぬが三ツ
の年に、とゝ様やかゝ様もわしをばゝ様よ預て、そこへやらいか志やん
しなげむ、夫でわたしひばゝ様の世話になつて居たけれど、とふぞとゝ
様やかゝ様に逢たい顔見たい、夫で方々と尋てあるくのでござります、
とゝ様の名ハ阿波の十郎兵衛かゝ様の弓と申ますと、聞て洟りお弓
が取付、^同とゝ様の十郎兵衛かゝ様の弓、三ツの年別れて、ばゝ様
に育られて居たと、疑ひもあい我娘と見れば見る程稚顔、見覺の有額^{ひだり}
の黒子^{はくこ}、我子かあつかしやと、いれんとせしが、待玄^{ミタケ}ばし、夫婦は今もと

らるゝ命元より覺悟の身あれ共親子といへど此子よ迄せんあ憂目が
かゝらふやら夫を思へばあるま中に名乗だてして憂めを見んより。もの
うで此儘かへすのが却て此子が爲あらんと心を立づめよそく夫々
夫のまあく年はも行ぬみはるゝの所をよふ尋に出さまやつ
たのふ、其親達が聞てあら、懼嬉しうてく飛立様に有ふが儘あらぬか
世の憂うし身にも命にもかへて可愛子をふり捨國を立のく親の心
よくくの事て有ふ程にむごい親と必ず恨ねがよいそや、勿肺亦
い何の恨ませう、恨る事いあいけれどちいさい特別れたればと、様や
かゝ様の顔を覺ず、餘所の子供衆が、かゝ様に髪結て貰ふたり、夜に抱れ
て寝やしやんすを見るとわしもかゝ様が有あら、あの様又髪結て貰ふ
物と羨しうござんす、ぞふぞ早ふ尋て逢たい、ひよつと、連れまいかと思
へば、夫が悲しうござんすと、あいぢやくりするいぢらしさ母の心もき

へ入思ひ、扱もく、世の中に親を成子と生るゝ程、惡い縁へあけれ共、親
が死だり子が先立たり思ふ様にあらぬが浮世、こあたざれ程尋てそ、顔
も所も志らぬ親達、逢れぬ時へ詮せんあい事、もふ尋ずと、國へいんだがよい
わいの、懸ゑしと、様やかゝ様譬たといつ迄かゝつてあと尋ふと思ふ
けれど、悲しい事ハ獨ひとり旅たびじやて、ぞこの宿やどでも、とめてられくれ走、野に寝た
り、山に寝たり人の軒のきの下に寝てハ擲なげれたり。こへい事や悲し事、と、様
やかゝ様と一所に居たりや、こんあめよハ逢まい物ものを、そこにつぶして
居やしやんすぞ、逢ない事じや、逢たいと、わつと泣出す娘より見る母親
へたまり兼まことに、道理ごとじや可か愛ぱいやいぢらしやと、我を忘れて抱付前後、正た
い歎きしが、是程親をしたふ子を何の此儘このぶいあされふ、いつそ打明あ
らふか、夫でハ此子このこも同じ罪、其時の悲しさを思ひ廻せばいあすが
爲ハと、段々の様子を聞我身の様よう思おもはれて、悲しい共情きょうじやうあい共ともいへれ

ぬ事あがら、兎角命が物種、まめでさへ居りや、又遙れまい物でもあい。
仕付ぬ旅に身をいため、煩ひで、も出でりや悪いとこをしやうと尋ふよ
り、其ば、様の方へいんて居るとの追付と、様やか、様が逢ひてじ
や程に、悪い事いゝぬ、思ひ直して、是から直に國へいんて、隨分まめで
親達の、尋て行しやるを待て居るのがよいぞやと、あだめすかせべ聞分
て、^{テイ}添ふござります、お前が其様にいふて泣て下さりますによつて、
とふやらか、様のやうに思ひれて、わしや爰がいにどむあい、どんあ事
など致しませう程に、やお家様お前の傍にいつ迄も、わしを置て下さり
ませ、悲しい事を云出して又泣すのかいの、さつきにからわしも子の
様に思ふて、爰に置たいいあしとむあいと、様も思ひ廻せ共爰に置てり
とふも爲にあらぬ事が有によつて、夫で難面いもすのじや程み、聞き分
ていんだがよいぞやといひつゝ内へ針箱の底をさがして豆板の、まめ

おを悦ぶ錢別と紙に包んで持て出。何ば獨旅でも、たんと錢さへやりや
とめる。僅あれ共志此銀を路銀にして、早ふ國へいにや、必ず煩ふてばし
たもんあと銀を渡せば押戻し、嬉しうござんすれど、銀の小判といふ物
をたんと持てあります。そんありやもふさんじます。添うござりますと、
あくく立を引とめ、夫のそふでも是のわしが志と、無理に持してち
り打拂ひ拂ともふいにやるか、名残がおしい別れとむあい。今一度顔を
と引寄て、見れば見る程胸せまり離れがたあさ、憂思ひ、夫としらねと誠
の血筋名残惜げえ、ふり返り、そこをせふして尋たら、と、様や、か、様に
逢れる事ぞ、あへしてたべ南無大悲の觀音様、父母の惠も深き、粉川寺、佛
の誓願もしきかる。あくく別れ行跡を見送り、くのび上り上娘ま一
度こちらむいてたも、打角長の海山こへ艱難してあこがれ尋るいとし
子に、ふしきと逢へ逢あがらるのらでいあす母が氣の様に有ふと

思ふ、狂氣半分半分の死で居るわいの、まだ長生の有子をば親故路頭に立すかと其儘そこにどうとふしきへ入斗歎しが、おき直つて涙をおさへ^音。やくせふ思ひ諦ても、今別れてい又逢事のならぬ身の上驚難義がからべかゝれ、又其時の夫の思案程へ行まい追付て連て戻らふそふじやくと子に迷ふ道へ親子の別れ道跡を、忘たふて尋行すでに其日も、入相のかねの工面も引違ひ、我家へ戻る十郎兵衛が、順禮の子の手を引て、女房共戻つたぞと、内へはいつて見廻し、こりや日暮紛れに火も燈さず、とこへいたとつぶやき、行燈ともしたばこ益^{ほん}さげて、どつさり高あぐら^音。そこあ子爰へおじや、今戻る道筋を乞食共が寄集り、わがみを剥^むで銀取ふとぬかしておるを聞た故夫でおれが連て戻つたが、わがみや銀でも持て居るかよ、その伯母様に貰て持て居まする、何がそんな事事を愚者共がかんぱつて、あぶあい事、そして其銀のを

れ程有ドレ伯父オジ見しや、ティ是れ程ドレござんすと貰モラフた銀ギンを差出せハサウ、コリ
や小玉が五十匁斗モト、もふ外にハ銀ギンのあいからまだ小判マサニといふ物モノがたん
とござんす、何しや小判マサニがたんと有アリ、小判マサニがてもマ夫マフのよい物モノを持て
居ハシマやるのヨレ此邊アヒナの用心ヒツヨウが悪いによつて、其様マタニに銀持ギンホて居ハシマると、今ナウの様マタニに
人に取れて仕廻ハシマふドレ伯父オジが預かつてやらふ爰アヒタへ出しやと、武太六ムタロクに約
束モチの足タリにもあろかと心ハラハラの工面カバンだましかくれを合點ハセテすアヒタ、此小判マサニの
財布マネーに、大事の物モノが包ハサフで有程ドレに、人に見せあとばゝ様マタニがいいしやんし
たによつて、誰カモにもやる事成ハシマせんと、大事マサニにする程猶マタニ見たく、おどして
見んと目メをいからし、其様マタニに隠ハシマすと爲ハシマにあらぬぞよ、痛ハリいめせぬ内ナカニちや
つと伯父オジに預ハシマておきや、そレでも大事の銀ギンじや物モノ、サア大事の銀ギンじやによ
つて持ハシマて居ハシマると爲ハシマみあらぬ片意路カコロいはずと預ハシマておきやといふ程ドレこれ
がる子供心コトコト、こんあ所マジに居ハシマる事モノいやと逃ハシマ出ハシマる首筋引ハシマ擗ハシマめハシマべドレこひいく

と泣出す。ヨリヤやかましい。近所へ聞へる、聲が高いと口へ手をあて、レ
こへい事のあい、有やうへわしも、ちつと銀の入事が有によつての、何ば
程有か亥らねど、二三日預てたもや、其内にハ又拵て戻そふ程に、まあ夫
迄ハちの内にゆるりつと逗留仕や、又觀音様へも伯父か連て參る、
よい子じや、聞分てサマ、ちやつと借てたもど、兩手放せばがつくりと、そこ
へ其儘倒る、娘、ヨリヤく何としたく、どぶしたと、いへ共さらに物いへず
恩を通りぬ、即死の有様、南無三寶、ヨリヤく目が廻ふたか、ヨリヤ順禮の娘やいと
呼いけく、口押明ヨリヤ氣付も水ももふ叶へぬ、オイはつと斗に餓のはいも
う、聲立させじと口へ手を當たが、思へず息を止め、夫で死だか、ア、
やマア不便と斗、鞠果たる折からに表へ聞ゆる足音、女房あらんと蒲團
で死骸、つゝみ傳ひをいきせきと戻るお弓、ガチ、ちのの人戻つてか、サク
ちやつといて尋てく、とせき切女房、たわけ者跡先をいへず尋てと

何を尋てお前のるすへ、國に殘した娘のひつるが、ふしきと爰へ來たわいの、ヤ何じや娘が來たとい、そりや母者人と一所にかどふして來たぞ。おつる一人でござんする様子といへば長い事、ふしきに娘とおつた故飛付様も思ふたれど、悲しい事へお前もわしも、お尋の身分あれば、今忘れぬ身の罪科を、何にも忘らぬ娘に迄俱に難義をかけふかと、わざと親子の名乗もせず、氣づよういふて此内をいあし事へいあしが跡で思へば思ふ程、ふも捨て置れぬ故直に跡から尋にいたれど、かけも形も忘れぬ故お前と手分して尋ふと思ふて戻つた。ちやつといて尋てと聞や聞すにきたわけめ、せんある事が有迎かれに毛衣らさず追いあすと、鬼でもそんあどうよくあ事へせぬわい、ヤコふいふてハ居られぬと、かけ出しがヨリヤそしていくつ斗でせんある着物着て居るぞ、忘れた事年ハ九ツ、中形の振袖に笈摺かけて、何じやア笈摺かけてア笈摺

も二親の有子じやみよつて、兩方へ茜染う茜染に中形ナミオはつと肝カハラみ
焼鉄ヤキガネさゝる、心地コトコト隙アモリが入程心がすまぬ、お前アヘ跡からわざや先アヘへと
いひ捨かけ出すお弓アマヅシをとメめコリヤもふ尋スルとよしにせい娘ムカシへとうから
戻アキラムつて居る、戻アキラムつて居るとハ、そりやせこよシそこの蒲團シダレの内スル、よふ寐
入て居るわいといふにふしんも立島の蒲團シダレを明て顔見るよりテ、ほん
に娘ムカシじやミ、嬉ハジケしやク、同お前アヘもこんあ事をらどうからそふといふたが
よい、人にいきせい毛アシをしてタマシ嗜タマシ志タマシやんせと恨ハシマツあがらも氣ヒいそク、
何ナニとマテ見ミやしやんしたか、大きふあらふがあ、そしてまあめつそふあ、い
かハナ草ハナ臥ハタハタて居れペ迎アヘか、げもおろさず、笈摺カガハタをかけたありドロく帶ハタとい
てゆつくりと久しぶりで母モチが添乳タマチと、笈摺カガハタはづし帶ハタとくく、見れペ手
足ハタハタもひへ渡アヘり、息ハラハラも通スルぬ娘ムカシの死骸ガハタ、こりや娘ムカシの死マツルで居る、とふして死
たハタハタふしてと、余りの事ハタハタに涙ハラハラも出スル、立たり居れり、夫アヘの傍アヘの娘ムカシ、

そふして死だ、お前様子知てじや有ふまいふて聞して、と氣も取登
す有様を見るに脾肉も離るゝせつあさゝ道理じや尤じや様子といふ
たら因果づくさつきに内へ戻る道、其娘が銀を持って居るを非人共がよ
ふ知て取の剥はのと聞た故、可愛そふみと連て戻り様子を聞バ銀も有故
少々成共武太六に返す工面、二三日借かてくれと譯わをいへ共子供の事、聲
山立て泣わめく、近所の聞人が氣の毒どきさについ口をあさへたが、息が詰
つて、其様に死で仕廻たゞ、いちらしい事こと志よたと、餘所の様に思ふた
が、夫が娘で有たといふ物の報ひか因縁事いんえい、これらへてくれよ女房と聞程
身も世よあられぬ悲しさ、そんあらお前が殺さしやんしたか、バア、ても初
も是非もあや情ひあや母お死骸しがいを抱上いだ、娘むすめ是程ほどむごい親おやぢをよふ尋
て來てたもつたの、獨ひとり旅たびでとめてあし、野のに寐ねたり山さんに寐ねたり、こへい
事や悲しい事も、と、様やか、様に逢まつたさ故ゆゑといやつた時とき、悲しうて

身ふしも胸も碎る様に有たれど、そこをじつとしんばうして、親共
いへずいあしたへの、わがみが可愛さ斗、其時とめて置たらばとふいふ
事へ有まいよ、いあしたはの此間違ひ、夫からふこつた事あれば、殺さり
やつたもわしが業堪忍してたもやく、年はもいかではるぐの道を
厭す苦勞して親を尋る孝行娘、親の夫にへ引かへてむごう難面追返し
まだ其上に親の手で、殺すといふに何事を別れにいやつた順禮歌、父
母の恵もふかき粉川寺、ここに是が恵が深い、こんあるむごい親子が廣い
唐ヌも天竺にも最一人と有物かと死骸の顔に我顔を押當く抱きめ
涙涕こがれ伏玄づむ、銀十郎も後悔の涙五臘をゑぼりしが、いふて返らぬ
事あがら、金の有事得しらずばこふいふ事へ有まい物、金が敵と死骸の
懷さがして財布取出し、中改むれば金三兩同是儘の金、いかぬ事も有や
う思ひちがひがやつぱり因果といひつゝ引出す財布の内、十郎兵衛

殿夫婦の衆へよ、こ書たれ正しう母の筆と封押切てよむ文牘でいわざく
認送りしたづれ、國を立のかれし其日を案し暮すに亘に親子の愛着あいぢやうにて、
浮世の中のあらひあれば、くどふ筆記ひじきへ記さずし、第一に申たさへ日外
申越れし國次の刀、郡兵衛に心を付て密に手筋とねを求め詮義致し所、則郡
兵衛盜取所持致し段、慥に聞出しひ故、早速詮義と思ひしへ共、女子の
身であるなかの事を仕出し返て妨さまたげに成てはと差ひかへ、其元の有家を
尋詮義せんと、孫のおつる諸共に旅の用意致し候内遁れぬ無常の風
に誘いざなれ力及ばず身まかりし故書殘しやし、ヤリヤ母人おとめり、お果はあされたか
いあ、此一通届次第早々國へ立歸り國次の刀を取戻し立身出世を草
業のかげなくれども待まつタスサヤ、の軍兵衛めが所爲で、母人の涉
さいて殘念至極と云あがら有難きハ刀の有所、是をヤも母の涉恩ゆゑんア、添
し嬉しやと歎の中の悦びを、聞てか弓も顔を上あお袋様のぶくろ最斯一日の

介抱もせすに別るゝ不孝、あ嫁せめて籠の其おみわしよも讀せて下さ
んせど一通取て涙あがら外又申事へあくひへ共孤とありし孫が事是
のみ黄泉の障りよし神佛の惠にてつゝがあう其元にもしも尋達たら
ば隨分く大事に育給ひるべくひ夫へく器用者にて物もよう書琴
も彈第一に縫物が手利みて縮緬どんすの衣裝迄手際よう仕立ひやう
教置り、是斗へはゝが自慢にし儘對面の後ぬへせて傍らんあされ
夫婦あがら譽てやつて給ひるべくひ、べく様の冥加あい常々から出
持にて桑山がよう利ひ故たんと持せて置ひ儘もし虫でもおこつたあ
らば此子の年の數程傍のまじあるべくひくぞふもく太切に育頬
上りべく是程大事にべく様の育上で下さんした物思へべく
うよくあ惜や悲しやいぢらしやと又も正脉なかりけり。いつ迄いふ
ても盡せぬ歎き刀の有家あれる上へ彼地へ下り誼義せんと、いさむ折

から表の方俄にさへぐ人聲足音、十郎兵衛きつと心付^{コリヤク}女房^{アガ}あの物音^{モノ}ハ必定^{ブジヤウ}捕手に違ひあい、何百人取まく共刀を我手入ん内へ切てく
切抜る^{カツハグ}と娘の死骸引だかへ、泣入女房^{アガ}を引立く^{ハシム}一間の内へ入にける。
程^{ハシマ}あく来る捕手の大勢^{ヤア}、盜賊の銀十郎本名^ハ阿波の十郎兵衛此所に
隠れ住^{ハシメ}由、武太六が訴入^{ヒセイ}によつて召捕に向ふたり、尋常に繩かゝれと聲
聲^{ヒトセ}いへど音せぬ^{ハシメ}、風^{アゲハ}をくらふて逃のびたか、家内残らず打こぼて、人數
ハ半分裏道へ廻れく^{ハシメ}といふ下家、天井戸障子佛檻^{ハシメ}戸棚粉^{ハシメ}もあく碎く
壁下地^{ハシメ}すき間^{ハシメ}もあらさぬ大勢の捕手相手に十郎兵衛が大わらへに動
くを、我組どめんと追取巻差付る松明^{ハシメ}の火花をちらして、いざみしが、十
郎兵衛一人に切まくられ皆くもの子のちりぐに、遂行すき間に女房
が此間^{ハシメ}うちやつと十郎兵衛殿^{ハシメ}、合點^{ハシメ}とかけ出しが、立とまつて^{コリヤク}女
房^{アガ}娘^{ハシメ}が死骸^{ハシメ}の何とした、そりや氣遣ひでざんせぬ、シ此通と死骸の上落

ちる戸障子積重松明の火を差付て、人手に渡さぬ火葬のいとあみあむ
あみだ佛を合す手も別れ別れて「立出る

第九

國民も豊鳴戸の阿波の國、徳島郷の町はづれ、弓矢神辻もてはやす、武士
へ取わけ町人も參詣群集をあしにける、往來も多き、其中に先を拂はず
小野田群兵衛國一はいに廣がりし權威を功に鼻高く、跡に引添海藏
院、眞言秘密の行法も人に勝れし惡僧と云ねぞした人相見家來諸共
立休らひ、^{ハシマ}群兵衛様何やら私よお頼の事有故此所へ参れと急のふ
使シテ詔用の筋へいか様の義でござります、いやくさのみ氣遣ひあ
事でひおりあい、イヤ何家來共濟等へ習しの内、社内にて待合せ、十郎兵衛
を見付あバ早速に相しらせ、油斷致する早行と下部を遠ざけ、小聲に成、
今日こあなたを召よせし子細といつぱちと密々に頗度胸有て苦勞もい

をへず此所へ其段のゆ免めんく。何と頼よりまれて吳おられうやヤモ様子ようしょの何か存せねど、當所のは家老郡兵衛様のかつしやる事、何しにする違たが仕しらんシナが頼よりの密事かつじあ、いやく様子ようしょを語は違たが變へん有る、郡兵衛が一大事ひとおとあたの命にもかかる事、何に寄よす他吉さんせぬといふ慥ざじか心庭こころば見た上で、御尤ご其心底こころふ目にかけんと嗜なじみ持もちしやたてより、筆追取ひしゆて、さらと紙かみに誓ちかひも即座そぞの血判ちばん小指わび喰くり誓ちかひ紙かみの表斯ひょうの通りと指出しゆせべ、其儘そのままとつてとつゝと見み、他言ほかごんあきせいしの文言ぶげい讀よむに及およぬ貴僧きそうの胸中きょうちゆう見届みとくる上うへ何をなにか包くまん、密事かつじといふは外ほかでもある、何卒どうぞこあたの行力ぎょうりきにて、玉木衛門たまきえもん之助のすけを調伏てうふくがして貰もらひたいま、あの湯主人ゆそとね衛門えもん之助殿のすけだいを調伏てうふくあさる、か心こころの聲こゑが高い成程驚おどろきの理某存あるる胸有こころう共衛門くわいもん之助殿のすけだいが有てて後日のちのひの難義事なんぎじやかましい、そこを存こじて此密談ひそかたん成就じょうごせば立身出世だいしゆしゆ、貴殿きだい迎むかも悪あくからぬ、身の納のり、此胸に子細こざいスの通りどと、語はればほくく打點うちぢん

頭、お氣遣をされますあ某が行方にて七日の内に落命さす行法奇特
我珠敷先お心安く思召と聞てぞくく小踊りし、頬母敷しく當座
の施物と一包渡せば取て押戴きお志の此施物受納致すと取納め心も
せげべすぐ様お暇、一時も早立歸り萬事の用意を早く、必人に悟ら
れぬ様、そつ共氣遣遊ばすあと人の難義も身の欲に呑込己が身の
上と、しらぬが諭陰陽師別てこそひ立歸る折から家來があへた
お尋の十郎兵衛向ふの茶見せで見受けましだが、此所へ参るハ治定いか
が斗ひやるんと聞も有せず、よくもしらせた暫くの間影隠しだまし
寄て召捕んこあたへ來れと郡兵衛ハ家來引連伺ひ居る斯といざや
重郎兵衛母の玄らせに隨ひて、此程よりも立歸る心當どハ郡兵衛に、た
よる術のとつ置つ思案工夫の後より、十郎兵衛やらぬと双方から取付
家來を引捕へ、何の苦もなく右左踏付く二王立、小野田郡兵衛聲をか

げ、十郎兵衛、江戸表もちくてんして行衛知ざる様子を聞べ今の大名へ
五右衛門の銀十郎といふ盜賊あるよし、當地迄も聞及ふ、お構の此國へ
立歸つたゝ運のつき、通すと下知に連取まく大勢届せぬ十郎兵衛
よい所へ小野田郡兵衛望む相人じや、^{サア}こいと、立かゝらんず其氣色、^{ソツ}
こいやらぬと隔て、下部^{シヤ}面をうと取て、投付欄でへぐつと一交めひ
よろくく、しそろにあつて見へければ、いらつて打込郡兵衛が目先
へずつとさし付る家來がからだで受身の備へ切を得やらぬ刀の手前
詮方もあく見へたる所へ斯と聞より櫻井主膳^{おぐれ}後ばせみ欠付れば、十郎
兵衛見る方、はつと、よらんとすれど此場の玄き思ひ計て櫻井主膳
^ア憎^{ナガク}いやつさし留おいた此國へ立歸つたる其上に、郡兵衛殿に刃向
ふい身の程知ぬうざいがき、今某が欠付しを跡先知ぬうぬが心に、主從
縁^{イマ}又もや助貰へんと思ひ詰た其眼色^{イヤモ}見遁す事へ初置て三寸繩

にくゝし上屋敷へ引て拷問する覺悟せよとすつと脅腕首取てぐつと
捨上。何郡兵衛殿斯斗ひし上からい最早といつに氣遣あし、先々刀を
お納めあされ、十郎兵衛とい以前の事今のお名ハ銀十郎櫻井主膳か召取
たゞ口と心ハ裏表かゝる繩目も御主人のお情もやと十郎兵衛いへぬ思
ひぞせつあけれ郡兵衛ハ當り眼。此方から頬もせぬに我ハ顔又繩打
れしひ某を踏付るのか何とくとかさかけて底の無念を押隠し負ぬ
顔玄て諸かくれば是ハく御尤手前左様の所へ氣も付ず、只御家來の
手に余り御難義と承り聞捨あらぬも主人へ忠義思ひ過した某が繩か
けたひ重。誤り、いましめはどきふ渡しやすん。十郎兵衛儕も命が助
りたくば隨分手柄に切抜い、勘當玄たれべ遠慮へあい。郡兵衛殿受取
召れ、是さく其の繩といてたまる物かやはり其儘受取ませう。

ふの致さぬ貴殿の難義を存ぜし故、以前のよしみも厭なく召捕た某、何

をやら其元を踏付るとの御一言尤至極に存るから、是非繩といてお渡し
し乍が貴殿を立る拙者が言譯、御覽あされと立寄て繩とさかくれば、
是さく、それへひつきやう時のはづみ、乍過しへ手前の鹿相其儘。
鹿相と有バ云分おりあい、殊に當月は貴殿の役目お渡し乍此繩つき。
十郎兵衛今聞通郡兵衛殿のお役目あれバ、懸す程爲にあらぬ、何もか
もとつくりと打明て乍上たら叶ハぬ迄も一命を助る筋が有まい物
でもあいと思へど、是迎もこつちに少しも構ハぬ事、何と郡兵衛殿左様
でハござらぬか、何のく譬、その様にぬかしても、助ると云字ハ毛頭ござ
らぬ、狼藉ひろいた其替り、拷門の仕様ハさまぐ、覺悟ひろげとおどし
てをびく其思ハぬ大丈夫、乍主膳様、お久しうりでお顔を拜し其かひ
もあり淺ましき此ざまにてお別れ乍、命の内に今一度、お目にかゝるハ
十郎兵衛が胸みとつくと云わけの工夫を致し此いましめのとき様を、

諭へてやさへ大切あ刀をさやみ納めた思案先夫迄おさらばとわつて云ねど刀の詮義主膳へ態聞ぬ顔聞た顔する小野田郡兵衛イサムごくにも立ぬよまい言レ引立と呼へればつと答へて大勢に引立らるゝ十郎兵衛心一ニ國次の詮義とさらに郡兵衛が嵐ニ散ぬ櫻井が胸の刃金ヒヨウハ直焼及引別れてぞ

第十

暫く待れよいづれも刀の虚實改めもあく持參したハ某が誤りとい云あがら代々預る殿の重寶チヨウボウ何望有て此刀隠し置ふ様もあし察する所此盜賊ナリゾクハ體外タマガイにといひせも果ずヤ其云譯ウヒワカくらいく殿の誕生三月三日吉例セキザイの通お屋敷にて鋤役目カツヨクモトハ貴殿と拙者シラフモノさるによつて今日内見の義仰付られ立合の今と成代々預る其元が盜ハスれたと計で申譯立ますまい此通を言上して殿の仰を聞迄ハシメテ身動きさせぬ貴殿の身の上只今

と郡兵衛が預かる、先づ大小を渡し召れ。違變へんござらば某が踏付で繩かけふか何とくときめ付る己のが盜し刀の詮義ひだい非道ひどうあがらも差當る言譯何と詮方も無念むねんをそらへ大小投出なげししみちんいさよかニ心こころあき證據しきぐハ則家來十郎兵衛、召捕渡せし我あれ共疑うそがひかゝりし此主膳、武士を捨てたる我魂たましひお預申上からひ郡兵我殿のお心任せまよい覺悟かくご、侍中主膳を奥へ引立ひきだてと下知に隨したがひばらくと取まくけらいの先に立さやけき空のつきかげも暫まことにしりくもる胸の闇よみがへ是非ひもあくく立て行跡見送つて郡兵衛が明るこあたの一間にい高雄たかがを假かの座敷牢ざぶつろう戀こいといしるき絹きぬの香かの姿すがたの花も及びあきコシヤ君あぜ浮うきよとし給たまひぬ、我等われらそもそもじに執心じゆしんから土手助どてすけにや付つく、漸此比連歸ひれんきり押おこめ置おきへ人目を遠慮能返事のぞまことさへし給たまひバ誰な憚はず直ただ々奥様おくさま望のぞを叶たがへ抱いだれて寝ねるかの様ようにおつしやつても、何の益えきあき此身このみの上あニ共ともあして給たまひらば生々世々の惨悲さんびと手てを合あわせ

すれバソリヤあらぬ、戀なればこそ此様に人の目顔を忍びの一間打明れば
其通たつていやといふがいあや、憂目を見するが夫でもいやか譬憂目に
にあふ逆も是斗ハ赦してたゞ、こふいふが憎いと思はば、いつそ手にかけ
一思ひ、イマ夫もあらぬ、惚た程又憎さを百倍返事さす思案を見せう。ヤく
せて助科人の銀十郎、早く是へ引出せの聲に従ひ繩取に引立られて十
郎兵衛刀の詮義爰かしこ尋る充も白浪の科を身にしる憂繩目見合す
十郎兵衛、高雄が拘り、ヤアお前の兄様十郎兵衛様爰へぞふして其繩目
とかけ寄裾を玄つかどゐさへよ、面白い兄弟あれば猶以ていやでも應
でも抱てねるよい橋渡しが出来てきた結ぶの神の引合せと玄づく
立て庭におり、ヤ十郎兵衛、げさ程も尋る通何科有て身が家來佐渡平
手にかけた、其上山口定九郎迄殺したるも臂がわざ、其譯ぬかせ何と何
と思ひ又玄つこいお尋、主膳様を待伏して殺さんせし佐渡平兩人、ぶ

ち放じたの主君の爲、結構あ傍主人又忠義を盡す來來も主も盜人、ヤ
ア郡兵衛櫻拙者ハ主人に勘當受糧に盡たる盜人銜我名ハよびせと傍
主人にい何を以て盜賊呼いり、櫻井主膳ハ刀の盜賊早先達て此家に
押籠こめうぬも大方同類あらん白狀ひろげと刀の鐔繩目に指込サ何と何
と何との問狀どかゝりつあがる高雄が思ひ想くるしくバ白狀せいヨレ高
雄、此責あが目に見へぬか、サ儕も苦痛が助りたくバ尋る事を早くまき出
せ、シ君うつふいて斗居す共、兄がざまをよく見給へ、懇の返事と白狀を
聞ぬ内ハいつ迄も、責道具の品をかへ、水責火責かさが鑑責じゆじゆつあか早く返
答せいと怨と情を一筋の繩もくひ入身の苦しみ見る又絶兼聲さへを上、お
前も武士の身じやあいか、情といふ字を書いてあら少あはれい哀あはれを知ぞかし、あ
んまり難面づれなどうよくと泣こがるれべ、つれあいそもじの事、おれが
心え隨へば現在の小舅責サクハ扱置科も見通す、何と憎ふい有まいが、サイナ夫

程迄まことにわわたしが事思ふて下さるお志無下まことにするではあけれ共、わしが
身で儘あらぬもふ此上まことにの兄様次第まことに、ハシをふ成なと、跡云さしわき見する
程猶よごつとよいくそふいやこつちも思案しわんをかへ、得心づくで抱て
寝る、仕様しじやうのかうじやと十郎兵衛じゅうらうびやうがいましめほほきコリヤ高雄たか、うそか誠か
えらね共、今まことにの詞ことわざに取付とけつけて玄くつばしくつへゆるめる兄あにが成敗せいばい、嬉うれしいと思おもやる
あら十郎兵衛じゅうらうびやうに返事仕かたやや十郎兵衛じゅうらうびやうげんざいそちその科人くわんじんあれど、懸けん
曲者くわんしゃ惚ほぬいた高雄たかが兄あに、主膳しょぜんが難義なんぎを身に引受ひきうけ、そちそが替かりに成なたくべ
高雄たかをくどいて抱いだして寝ねさせ、此役目このわくめい仕課しこくせる迄まことにわが體からだのわれに預まかる
繩なわのとけしを幸さいに逃隠とうひんれても逃のがせぬ、千里ののべを獄屋くくやの内うち、高雄たか
も兄あにが助たすたくべ暮合はぐあ限りに返事かたせい、兩人りんじん共ともに郡兵衛ぐんびやうが習ならしの用捨ようす
惚ほたが因果いんごとつくりと思案しわんして色いろよい返事かたを待まつて居ゐる、聞入きいりぬ其時そのとき
兄あにも妹めいもあぶり殺あぶし、生死せいしニツ二つ一いつの返事かた、奥おくで待まつぞと郡兵衛ぐんびやうの色いろ故ゆゑ

ふる雨夜の空、見分兼たる胸の内、心殘して入にける。とつくと見すまし
小聲に成申申高雄様、刀詮義の爲じや迎げんざいお主の御息女様、御家來
の郡兵衛に様付あるゝのみあらず、中間ふせいの妹とけがに申も勿
躰だ。あい、御ゆるされて下さりませチ、あのいやる事わいの、びふそあたの
入込を待て居たも今の方たら、そんあ事氣にかけずととかく大事ハ刀
の有所をふぞして今宵の内に、拙者も左様存するから、何卒少の手が
かりをと思ふに幸郡兵衛がああたよ惚たがよい手がゝり、心得がたき
れきやつが大小、戀を叶へるお顔にて油斷のすき間に渉らんあされ、と
しらへい違ふ共もし國次に極らば、中心ハ則亂燒鉗は金にて庭草に飛
かふ蝶ての彫物有實正夫よ極らへ透すきを覗うかひ手箸てしょを遊ばせ、私ハ其間奴部
屋に身を隠し善惡二ツを待てあります、成程く、肌はいふれぬを郡兵
衛にかの懸路も刀の役目、取かへさば主膳あんぜんを安堵あんづ、そあたに志らす心の

ゑんき、花の櫻木人の武士と中よ勝れし名に寄て、ゑらす相圖も奥庭に、
今をさかりの櫻花此水筋へ流すべし、其時必合点か、バ心得ましたと立
上り水筋清き我身をも暫しへ懸れ陸奥の忍びてこそハ別れ行、早約束
の兼てより、とがるゝ君がよしあしの返事いかゞと、郡兵衛が出るもゑ
らすこあたにいだゞとつ置つの思案より外へ何よりも夢うつゝても味
い後付見れば見る程たまられぬ返事へぞふじやといふ聲よ思へず悔
り立のく所、おつとにがじり仕らぬ、最前いふた約束のかねへ聞たが返
事へ聞ぬ、一人爰に居るからハ十郎兵衛が得心させ、大方抱れて寐る氣
じやあろ、添いサカフジや寐よふと我一人、せり立ちるゝ身のつらさ、何
とこたへん方もあり色に心の一大事。さがして見んとゑたひ寄、高雄を
膝にいだき上かふした所ハ正眞の天女を抱たを同し事をふもあらぬ
と抱付て、うつゝに成たる郡兵衛が刀をそつとコリヤ何する、バヤサ刀をとら

へて何とする、何としの郡兵衛様、わたしが事のふつゝりと思ひ切て下
さりませ、其かへりにい今爰で尼法師ニホジとさまをかへ、一生殿傍に肌ふれ
ぬがおまへの詞を立る道理、夫でわたしひ此刀と又取かゝるを引はな
しそふぬか玄やふつゝり思ひ切其替り、十郎兵衛ジロウヒサエへ云に及ばず、儕も共
に目よ物見せん、ヤア土手助、此女を裏の樹木ツリモトと猿ヤマネつあき、又此二腰ツノウの主
膳ザンが大小、詮義濟ゼンギ迄汝タマ預る、高雄を早く引立ハシメテ、畏カシコつたとあらけあく小
腕カフナ取て奥アキへ行かゝる折節海藏院切戸間近く入來り、彼カミお頼の一大事、殿
を調伏アセムのほ祈禱キトウも七日満マツする今宵ヨロあれば、お頼申た祈禱料キトウリ只今をふ
ぞと、皆迄云さず音高し人や聞、何角カタツムリの禮の跡より通達、折あしければ
先歸りやれ、然らばお暇必お禮スルてつとり早ふ、ヨトサ合點ハツヂも眼アヅクで志らし點ハツヂ
頭アツシ聞く衣アラシの袖アラシ、人ヒトを助アシる躰ヒカラをよく工ハシメテ百八煩惱ハチヤクの、珠數ツブの撒スル々くり返し
別れてこそ歸りける、奥庭オノニの嘆亂タムラれたる、櫻花詠めに、明ぬ泉水の、水ミズ

すめ共にこり江の高雄へむざんや櫻木に玄めからまれし縛り繩、今ぞ生死の境かと涙の顔をふり上て、こふいふ事とい露玄らず、嘸十郎兵衛が待て居やらふ、ぞ此事ついちよつと玄らせん事も情あや、此身へ櫻に搦られ刀の有家も得玄らず、元より主膳の擒れを助る事も心に任せ以、それも何故此繩目、誰そ解てくれぬかい、ぞふぞ切ぬかとけぬかと身をもみあせる氣へそいろ、心も空えぢりぐと殘の雪も身につき思ひ重る詫泣、郡兵衛の人で、みずく刀を盜あがら、科あき者を罪に沉め、其身斗が立物か、物の報ひたつた今思ひ玄らさで置ふかと恨の涙はらく、花へぢりぐ、泉水の流れにふつと心付、そふじや、相圖に流す櫻花、已と獨流るゝ神佛のお力と悦びいむ折からに、花を相圖よ十郎兵衛首尾いいかにと前栽の、玄げみをそつと差覗ぞき、見て悔くりの縛り繩、十郎兵衛か、高雄様、此の繩目へ何故とほぞけ

ととけぬ涙聲、何故とへ郡兵衛が戀を叶へぬ見せしめと、乞めからまれて身へ叶あへず、今ま迄泣いて居たれいの、傍もつともく、譬へその様に思し召ても女義のお手でいかあく、此の上へ私しがふ前様を取持顔でだますに手あし玄損せぬ私次第にあされませと伴ひ入んとする後ろ、さつこいやらぬと奴の土手助、^お旦那をだまさん迎妹でもあいやつを兄弟との心得ぬ、此胸主人にゆ上る待ておれよとかけ出すを、何の苦もなく引擱そべ成井戸へまつさか様^{サノ}是で氣づかひ内證の入譯えらねば^{サア}お出と、開く障子の内にへ郡兵衛、^ヤ十郎兵衛、縛り置た其女誰が敵してわりやといたいや深い様子へ存ませぬ、私がといいたいあなたのお望^{のぞみ}此妹を上ませうと思ふて、それでといたのでござります、すりや其方が得心させたか、成程く、得心の上にのし付て、只いつ迄もお前様の女房、此十郎兵衛の兄じやら仲人やら御用も有^バ澤山にお

遭ひあされて下さりませ、すりや身共が女房とあ、夫の重疊、望み叶ひし
上からい高雄が兄の十郎兵衛我爲にいへ、小舅親しき一家を成から
い、小舅殿へ頼の印、まつかふ碎くだけとだまし打心得はつしと水手桶コリヤお前
何あされます、一家中いっかくの心安ふ。かやうにお氣をはらはらえやますと、我等
いかふ迷惑めいわ、千万、ひらに納めて置れいと、拂へ付込郡兵衛が尖するき手の
内屈せぬ十郎兵衛、ひらりとかいはず身のひねり猶も付入間もあく、庭の
飛石かづき上受る白刃の轉業稻妻てんとういなづま、目早く高雄が取上る刀の正しく國
次と、云せも果ず郡兵衛が夫見付たら生てへ置ぬと、又切刀かいくいつ
て玄アキつかと取殿の重寶見出さふ爲捕らへられた十郎兵衛、高雄様と云合
せ兄弟といふたも、噬誠の先殿賈物様のよ亂ハラハラと、聞いて驚く計ハシ、一間の内
より櫻井主膳さくぜん、土手助刀はつと答へて奥庭より、出る奴も詮義の種くわう、遁出
かした十郎兵衛、一つの功の立た上へ以前に替らぬ主從しゆしゆぞと、詞にはつ

と飛しさり、悦び敵ふ斗へ、郡兵衛殿、最早遁れぬ貴殿の工み、包ずも明
されよと、工みの裏道堀返され、叶へぬ所を怪根をすへ、^同、扱へ土手助め
も、主膳が家來で有たよあ、顕られし上から隠すに及ばぬ、出頭の其方
を科に取て、落さん爲いかよも國次の刀ハ盜置た、戻して仕まへバ事ハ
濟、是より外云聞す事ハ、あい、刀を持て早歸れ、刀の事より大それた
貴殿の工、大錄を戴ふがら何恨有て殿を調伏、だまれ主膳、其方にこそ遺
恨有、殿に恨ハ毛頭あし、さいふ汝が證據ばし、其證人ハ是に有と、海藏
院に繩をかけ、引立てる伊左衛門、もふ百年めど郡兵衛が切込刀、身をか
へして腕首つかみ重^同の極悪人それ繩うてと櫻井が、引かついてずで
んどう、起上る間も十郎兵衛が、押へてかくる禁^同、心地よくこそ見へに
ける、出來たく、盜取れし國次の刀諸共、二人の囚人成敗^{めじうせいぱい}ハ殿のか差^{さし}
圖伊左衛門義ハ此度殿の正婚禮^{ほんれい}おめでたの祝義として、町人あがらも

阿波鳴門

百四十

は扶持頂戴それを規模に以前のごとく藤屋の家を取立る家の女房
絆やお辻、夕霧の妾分相續怠る事あかれど、詞よりはつと勇立、昔に歸る伊
左衛門、紙子姿も引かへて古郷へ鎊る錦の袂、からぬ國の末繁昌治る
道も戀の花情の月ハ武藏野や名にし高雄が傾城姿、今國入のお姫様、道
中賑ふ竹本の盡せぬ御代こそ目出度けれ

明和五年戊子六月朔日

傾城阿波の鳴門 終

明治廿五年十二月廿五日印刷
明治廿五年十二月廿六日出版

讐

行

者

内

藤

加

我

日本橋區通四丁目四番地

日本橋區新和泉町一一番地

印

刷

者

瀧

川

三

代

太

郎

阿波鳴門

發

兌

金

櫻

堂

日本橋區通四丁目四番地

